

弘前藩の刑法典 (十三) — 寛政律 —

付 『御用格』二十一 (国立史料館所蔵)

橋本久

目次

はじめに

一 安永律

付1 『御刑罰御定』(安永律)

〔第六号〕
〔第十三号〕

付6 『要記秘鑑』三十三 安永四年八月二十六日条

〔第二十号〕

二 寛政律

(一) 『御刑法書之写』

〔第七号〕

(二) 『寛政律』(その一)

〔第八号〕

(三) 『寛政律』(その二)

〔第十一号〕

(四) 『寛政律』(その三)

付2 『隠商通料定牒』

(五) 『寛政律』(その四)

〔第十三号〕

付3 『人別方御用取扱条例』 『人別調方取扱条例』

〔第十四号〕

補訂1 『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」

〔第十五号〕

付4 『諸取引御触書』 『公義御書付留』 『公義御触書留』

〔第十七号〕

付5 (参考) 『公事訴訟取捌』

〔第十九号〕

(六) 『寛政律』(その五)

〔第二十号〕

付6 『要記秘鑑』三十三

〔第十七・十九・二十号〕

料

(十) 『寛政九年 刑法』

〔第二十二号〕

(十一) 『法律秘略』

〔第二十二号〕

付7 『要記秘鑑』三十四

〔第二十一・二十二号〕

資

(十二) 『寛政律』

〔本 号〕

付8 『御用格』二十一

〔本 号〕

(十三) 以下

三 文化律

二 寛 政 律

(十二) 『寛政律』

凡 例

- 一 原本は弘前市立弘前図書館蔵本（G K 三二二・五二八五）を用いた。
- 一 字体・字配りは、できるかぎり原本にしたがった。異体字・変体仮名については、かならずしも原本通りではない。
- 一 原本の塗抹は元字の左に々を付し、右に訂正した文字を記した。
- 一 原本の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すために「をくわえた。
- 一 原本には見られないが、各項目の前に適宜行間を空けた。
- 一 原本の丁数・表裏を各終行末に「」で示した。
- 一 便宜上、(二)〜(十一)に倣い、各項目に「一、二、三、……」各条文に仮番号1、2、3、……等の数字を付した。ただし条文番号の18〜21は省く。
- 一 他に適宜書き加えた箇所は「」で示した。
- 一 変体仮名・異体字等に対応する仮名・正字を「」で示すのは一箇所にとどめた。

〔表紙〕

明律台刑
明律台刑

寛

此度御刑法御改改仰付ゆニ付沙汰仕ゆ勉明
律ハ歴代刑法致損益相立ゆ儀ニ付律之輕重宜く
義理共ニ正く御座、得共當時ニ比へゆ得者一様之
律重く御座ゆ間明律ニ而苦罪（苦罪）ニ相當ゆ部ハ大方戸メ
ニ而相済ゆ振合ニ御座ゆ猶又刑法も逆ゆ間其他ニ而
難相用依之當時通例行ヒル刑名を以明律之格ニ
随ひ差等相立專其義理義ニ依より輕重相分ケ申ゆ右
之内 公儀御定之拘ゆ儀并是迄之御法ニて俄

〔24.5cm 横17.5cm〕

輕重難相成分ハ与得沙汰仕對酌加減仕ゆ間此度
御刑對御沙汰御座ゆ節若此度相定ゆケ条之内
洩ゆ儀御座ゆ而も右之趣を以明律を致參考罪之
輕重無之様被 仰付ゆ様奉存ゆ則此度相定ゆ御
刑法名目与明律刑名之相當之差等如左

戸メ	答刑
五日	十
十日	二十
十五日	三十
廿日	四十
三十日	五十
鞭刑	明律杖刑
三	六拾
六	七拾
九	八拾
十二	九拾
十五	一百
鞭刑追放	明律徒刑
十八 所拂	一年杖六拾

料

資

二十一里	一年半杖七十	
廿四里	二年杖八拾	(二才)
廿七里	二年半杖九十	
三十里	三年杖一百	
大場御旗 <small>(俵)</small>	明律	
徒刑	流刑	
半年鞭三拾	二千里杖一百	
一年鞭三拾	二千五百里杖一百	
一年半鞭三拾	三千里杖一百	
死刑	斬即決	
斬	明律	
死刑	死刑	
獄門	絞	
絞	斬秋後	(二才)
火刑	火刑者火附を極めて重科ニ相立事 公儀御定ニ付明律相當無之	
御刑法御定		
定例		
御刑法名目		
戸メ五		
戸メ五日		
同十日		
同十五日		

1 一

2 二

同廿日
同三十日
但子兄弟或ハ奉公人之類戸ノ難相成者右日
數之通過料人夫或ハ一日六拾文之積を以過料
錢為差出此事
(三才)

3 三

鞭刑追放五
鞭十八搦新
同廿一三里
同廿四五里
同廿七七里
同三拾十里 大場御旗
(三才)

鞭刑五
鞭三
同六
同九
同十二
同十五

但追放ハ鞭十八以上ハ得共其罪子細より其所ニ
難差置者ハ鞭數ニ不抱所捕可致事

四 徒刑三
徒半年鞭三拾

同一年鞭三拾

同一年鞭三十

但徒刑之者ハ銅鉛山ハ差遣鞭之上年限之通
便可致事

五 死刑四
斬

獄門

磔

火刑

刃

六 贖刑
鞭三八

同六ハ

同九ハ

過料三貫六百文

四貫二百文

四貫八百文

〔四ウ〕

七 五逆之事

同十二ハ 五貫四百文

同十五ハ 六貫文

同十八ハ 拾貫文

同廿一ハ 拾五貫文

同廿四ハ 拾八貫文

同廿七ハ 廿壹貫文

同三十ハ 二拾四貫文

徒半年ハ 三拾貫文

徒一年ハ 三拾三貫文

同一年ハ 三拾六貫文

死罪ハ 四拾二貫文

右過料之儀ハ老幼癡疾之類刑ニ不可行者

并過ニ而人を殺或ハ疵付ハ類相當之過料ニテ

罪を贖ひ可申事

一過料之者若貧困ニテ上納難相成者ハ銅鉛山ハ

差遣し一日六拾文之積を以夫役ニ使ひ可申事

若又老幼癡疾之類夫役ニ茂難相成者ハ其身

牽舍之上一年或ハ二年ニテ用捨可致事

〔五ウ〕

一 惡逆

祖父母父母を打罵し、或ハ殺さんと謀り、或ハ祖父父母、祖母方之祖父母を殺し、夫を殺し、婦を殺し、婦を殺す之事

9 一 不道

一家之内死罪ニあつたる者三人を殺し、人の支體を切ふとき、こく切害いふし、害之罪

10 一 大不敬

御宗御御物、御召物等を盜取らる之事

11 一 不孝

祖父母父母之事を誦へ、或ハ悪口いふし、其父母之供ひ、事しからず、難澁せしむる事

12 一 不義

支配之者頭分之者を殺し、弟子として師匠を殺し、此者之事

八

老幼癡疾之事

一歳七拾以上拾五歳以下并癡疾之者死罪以下贖ニ而用捨可致事八十以上拾歳以下死罪を犯し、此者ハ上聞之上時之旨敷御沙汰可ト仰付事

贖并人ニ託付らる者贖を出させ可申事、其餘罪ハ

御攝無之九十以上七歳以下ハ死罪ニ而も不可加刑事

但罪を犯し、去老疾ニ無之に共、夏通連、節癡疾ニ、時ハ老疾を以御沙汰可致事、幼少之罪を犯し、壯年ニ至り、事頭連、節幼少之罪を以沙汰可致事

一 癡疾之罪、而人事不そつ進、此片輪病人を言なり、馬鹿亂心之類も癡疾と可致事

九 一 尊人ハ首従を可別事

一 二人以上申合罪を犯し、節者其内趣意相企、此者とも首と致し、事其餘者従与致し、事従之者ハ首が罪一等を減し、可申事、尤本文ニ同、頭不致と有之ハ首従之差別無之事

一〇 一 一人ニ而二罪有之事

一 九二罪以上共、頭ハ節者重き者一ケ條を以罪を定む事、若一罪先、頭連ハ既、刑を加へ、後外之罪頭連節者重き者并同等科ハ御沙汰、不及若跡ニ頭連ハ科重く、此者沙汰直しに致し、前罪之數引渡る數、斗刑を加へ

一一 五科合連座ニ可致ケ條之事

17 一 惡困類

一 惡困類

一 盜犯
一 博奕之宿

一 隱商賣

右ヶ条分ハ罪を犯ゆる者組合之者本人罪相

〔七ウ〕

當を以科ニ直し組合四軒ハ差出ゆる事

但組合四軒ニ不満者ハ四軒之割合を以不足分ハ容赦
いふし

一三 科人自身申出ゆる者

22 一 意圖惡事を致ゆる者夏未頭已前ニ自身申出

於て者其罪御容赦被仰付事但合人を疵付

或ハ物ニ寄不可償品并姦通類ハ不許事

23 一 竊盜或ハ手段等にて人之財物取其後過を悔

ゆる自身と本人へ返ゆる事

上へ申出ゆると同前其罪可許事

一三 親族ハ罪を隠ゆるも御容赦之事

〔八オ〕

24 一 父母兄弟伯叔父姑夫婦之間罪有之相隠ゆるも

御咎無之事但其事を泄し逃去らしむる共

不可罪事家來主人之為不隠ゆる是又同様

之事其外妻之父母娘之姪夫之兄弟ハ相隠
ゆる節平人より罪三等減し可申事

一四 親族輕重之事

25 一 本人に祖母と有之ハ高祖曾祖同様之事孫と

有之ハ曾孫玄孫同様之事嫡孫承祖ハ父母と

同様嫡母養母者実母と同様之事

一五 罪可減者果威を得ゆる事

〔八ウ〕

26 一 譬る罪を犯ゆる者首と従と有之時其從之者

罪一等を減しゆる上其者外可減時子細者又姦

等も毀々減可申事

一六 婦人罪犯ゆる事

27 一 婦人の罪を犯ゆる者鞭拾五ノ不可過鞭十五以上

相當の節ハ鞭十五鞭切て残る數ハ科して罪を

贖ひ可申事

28 一 婦人の褻刑ハ褌袴之上より打可申但姦淫

之罪ハ衣を去り直ニ打可申事竊盜之類ハ

入墨可許可申事

〔九オ〕

料 一七

不儀之財物取捌之事

29 一財物之上にて罪を犯は者本人相手共ニ有之時其財物ハ没収可致事若相手方罪あり本人罪無之時ハ其財物ハ本人江返之事

資

30 一其物之没収可致もの并本人江可返者既ニ費し用ひは得者可令償出事若科人身死はても品物費用は節者取立不及事

一八 同類之内出奔有之片口ニ相成は者之事

31 一同類之内老人ハ出奔致し老人召捕は節其者出奔いしは者越本人之旨申出別証人無之時ハ〔九ウ〕其者ハ従といし刑を可加へ事其後出奔いしは者を召捕亂明いしは節取初之者本人ニ無相違は得者則首与い多し残る刑を加へは事

一九 罪科加減之例

32 一加へ与言は本罪之上不猶加へて重く致は事減与言ハ本罪之上を猶減して軽く致しは事但減は節ハ四段之死罪三段之徒罪者一等級致し減は事加へは節ハ一段毎ニ一等級致は事猶又加罪ハ徒一

一年半鞭三拾限にて加へて死入廻可入者ハ其訊斷有之候事

二〇 隅所之事

33 一隅所之事鞭三拾以上專刑欲を拘科ハ其利欲之輕重依り田畑或ハ家屋鋪家財等隅所可申付事重罪にて利欲ニ不拘ものハ律之条ニ出は外ハ隅所ニ不可致事

二一 取押之物之事

34 一惣而禁を犯は者を取押は儀其掛り合役筋之者ニ無之は者其品物取押は者ハ被下は事其役筋にて取押はハ押物多少ニより御賞被下没収可致事〔一〇ウ〕

二二 人を謀て殺は事

35 一宿意を以謀て人を殺はもの其張本人ハ獄門加談手傳い多し殺は者斬罪加談斗にて手傳不致者ハ徒一年半鞭三十

36 一疵付は斗にて不死時ハ張人斬罪加談之者手傳

〔一〇オ〕

〔一〇ウ〕

致ゆる者徒一年半鞭三十

37 一 謀殺之事行ひし得者疵付不申ゆとも張本人ハ鞭

三拾加談手傳之者鞭十五

38 一 右之張本人ハ縱其場ニ不臨ゆとも殺ゆ節ハ共

身手ニ懸ケ殺ゆも同前疵付節ハ手ニ掛ケ疵付

ゆ同前之事加談之者其場不臨ゆ得者其場ニ

臨ゆる者より罪一等を許可申事

39 一 若困之財寶を取ゆ得者強盜之律ニ隨ひ張本人

加談之差無之不殘餘但同所之内ニ而も財を

分ケ不申ゆ得者謀殺之律ニて捌ゆ事

二三 謀て親を殺ゆ事

40 一 謀て親を殺ゆる者不限肆し者鋸引婦人夫

之父母を以て殺ゆ同様の事

鋸引之者罪之次第建札致し往來道路ニ

おゐて肆之事三日往來之者勝手次第鋸

引為致ゆ事右日限相済ゆ迄鋸致ゆる者無之

以得者其節引廻之上條

41 一 殺逆之事既行ひし得者縱疵付不申共磔

42 一 親殺之者妻子不殘遺追放家屋鋪家財闕所但

子ニ而茂別居之者之ハ御容赦之事

43 一 親殺之者於自滅ハ死骸塩殺^{〔前〕}可致事

二四 親族之謀殺

44 一 祖父母を殺さんと謀リ已行ゆる者獄門殺ゆ

得者引廻之上條但母方之祖父母同様之事

45 一 婦人夫の祖父母并夫を殺ゆる者同様之事

46 一 伯叔父姑姉ハ謀殺已ニ^{〔行、世〕}ひ得者徒一年半鞭三十

疵付ゆ得者磔

47 一 祖父母子孫を謀殺いしゆる者解死人ニ不及

從^{〔從〕}一年半鞭三拾

48 一 伯叔父姑之甥姪を謀殺いしゆる者解死人ニ不及

い多し謀殺ゆもの斬罪

二五 謀て主人を殺ゆる者

49 一 謀て主人を殺ゆる者男女不肆し者鋸引但疵

付ゆる者行ゆる者惣して子之父母不對し候

同様の事

〔二一ウ〕

〔二一ウ〕

二六 女不困て夫を殺ゆる者

料

51

一妻妾他之人と交通いふし因て夫を殺し
者引廻之上謀姦夫ハ獄門若男の手段而已
ニて女其謀を知といへとも女者斬罪又女之
手段斗ニ而男其謀を不知ときハ只姦夫之刑
ニ一等を加へて罪ニ行ゆ事

〔二二ウ〕

資

52

一妻妾人と交通い多しゆを現左交通之所
おゐて見届即時殺ゆ者ハ御咎無之事若
其場を立去ゆ後訴も無之擅不ゆ者喧嘩よて
人を殺ゆと同様之事

二七

一家三人を殺ゆ者

53

一家之内非死三人を殺し并人の支體を切
切不るときむこく殺害いふしゆ者引廻之上謀家
財闕所死者之家江被下ゆ事妻子ハ違く追放
致加談ゆ者手傳いふしゆ者共ニ獄門
但追放之儀別居之子ハ御用赦之事

〔二三オ〕

二八

頭分之者を謀殺ゆ者

54

一支配之者頭分之者殺さんと謀既行ゆ得者徒
半年鞭三拾疋付ゆ得者斬罪殺ゆ得者謀

二九

咒詛毒藥

55

一咒詛調伏等以殺さんと謀ゆ者謀殺之者律
を罪ひゆ事若只人を苦めんと謀ゆ者二等
を減しゆ事毒藥を用ゆも同様之事毒藥賣
未用ゆ者鞭三十其事知て藥を賣ゆ者同罪
不知時ハ御咎之なし

〔二三ウ〕

三〇

打擲て人を殺ゆ者

56

一本より切之て殺ゆ心ニは無之一時之喧花打擲
ニて人を殺ゆ者ハ斬罪尤相手方理不尽之致ニ而
よて不得止事切害ニ置ハ相手方親類名主僉
儀之上被殺ゆ者平日不法ニ相違ニ無之者死罪二
等を減し可申事

〔二四オ〕

57

一同謀て人を打擲致し死ニ至りゆ得者意所之
疵を得させゆ者を解死人ニ可致事但取初之
事を企、者徒一年半鞭三十訴人何連も鞭拾五

三一

怪我ニ而人を殺ゆ者

58

一怪我て人を殺ゆ者或ハ疵付ゆ者打擲之律ニ依

て贖を取り其より被下ゆ事

59

一途中馬車ニ而人を過ゆ者緩急之事無之者
怪我を以沙汰可致事若不慎之儀ニ有之者得者
打擲之律を以刑を可加事

60

一危き仕業をい多し因て人を殺ゆ得者贖ハ難
相成打擲ニて律を以刑を可加ゆ事

〔二四ウ〕

61

一喧嘩等ニて傍之人を殺ゆ疵付ゆ者喧嘩ニ而殺
し疵付ゆと可為同様の事

62

一若又謀て人を殺さんとして過て別人を殺し
疵付ゆ得者謀殺を以沙汰可致事

三二

夫有罪妻妾を殺ゆ者

63

一妻妾夫之祖父母を打擲とより其夫打擲
因て死至リゆ者御構無之若又強て亭擅^{〔イア〕}

殺ゆ者鞭十五但外之罪等々依り打殺ゆ者

解死人^{〔イウ〕}ゆる過く事

64

一夫妻妾を打擲或ハ罵り等致しゆ依り其妻
妾殺い^{〔イイ〕}しゆ者不及御汰沙事但重キ疵等

〔二五オ〕

為負ゆ節ハ夫妻妾を打擲之律^{〔イウ〕}依て沙汰可致事

三三

人を通り死を致ゆ者

65

一事を依て人を通り其自殺い^{〔イイ〕}しゆ者鞭十五
并金二兩を出させ死者之家江被下事若殺を
行盜を致しゆ為人を通り死致ゆ者獄門

三四

人殺之者内済致ゆ者

66

一祖父母父母人之為^{〔イイ〕}殺さ連其子孫内済致ゆ
者徒一年半鞭三十夫殺ゆ而内済致ゆも是同
様之事伯叔父姑兄姉ハ二等減可申事若子
孫人之為^{〔イイ〕}殺さ連祖父母父母内済い^{〔イイ〕}しゆ者鞭
九常人之内済も鞭三

〔二五ウ〕

67

一内済之為に^{〔イイ〕}所^{〔イイ〕}者ハ錢之高を以竊^{〔イイ〕}重
重き方ニ而沙汰可致事但父母殺さ連所^{〔イイ〕}者
死罪

68

一同居或ハ同行之人を初より其人を謀て害せ
んとする事をそんしな可ら不留者并彼殺ゆ後
不訴者ハ鞭十五

打擲

三五

喧嘩打擲ハ疵之輕重以罪を定ゆ事

〔二六オ〕

料 69 一手足或ハ外の物を以人を打撲いしむ者戸メ十日

疵付れ得者戸メ二十日

但打ハ外不被らとも青赤ニ腫れを疵と定ら事

資 70 一血鼻口より出或ハ内損血を吐け者鞭九不淨之物を

以て人を頭面汚しけ者右同様之事

71 一歯落或ハ手足之指一本を折一目を傷り耳

鼻を傷け者鞭十五湯火を以人を傷りけもの

不淨を以人を口鼻之内へ入け者皮同様之事

72 一齒二枚指二本以上を折けもの鞭十八

73 一人之骨を折并兩目を傷メ或ハ婦人之胎を墮し 〔二六ウ〕

并一切之刃物之切疵を鞭廿四但兵器にて柄を以

打ぬ節ハ刃物ニハ無之事

74 一手老本足一本を折或ハ一目を潰しけ者鞭三十

75 一兩手足を折或ハ兩目を潰し或ハ持病等有

之処因之癢疾ニ至らしめけ者并人陰陽を

傷け者徒一年半鞭三十右科人之家財半分を以

疵得け者按下け事

右之条々之科人大勢にて犯しけ節其内

疵付候者を重罪ニ致け事ニ趣企め者ハ

疵付不申けとも其次之科ニ申付け事但疵を〔二七ウ〕

得け者若死ニ至りけ得者同行之内人を殺け節

76 一噎嘔にて双方疵を得け節双方之疵相改疵之

無重にて罪を定け事尤跡より手を下し埋

直き方々ニ毒を置可申事

三六 瘡療治之事

77 一疵を置りけ者日限を立打撲之者ニ療治致さし

むへき事日限之内死れ得者打撲之者可為

解死人之妻若日限之内にても疵平癒致け節蓋

出後餘病ニ而死れ得者只打撲之罪を加可申事 〔二七ウ〕

78 一摺一本を折れ以上之疵日限之内療治にて平愈

いしむ得者罪二等を減し申通し日限満る日

追平癒無之ハ右之本符を相用け事尤婦人之

後産并病氣平癒にても癢疾等ニ至りけ者罪減し

申通しき事

79 一手足其外之物にて輕き打疵者限金割火

毒ハ三十日限手足を折骨痛ニ婦人之腫胎

者五十日限

三七

勢を以人越縛り打擲致ゆる者

三八

一 争論ニ依りて人を縛り打擲いし或ハ私

〔一八オ〕

家におゐて押籠等いしゆる者鞭九若疵重ク内

損吐血以上ニ至りゆる得者平人打擲より二等を加へ

可事（申付）尤自分手を下し不申ゆるとも差圖致ゆる者

本罪ニ可致事差圖を受手を下しゆる者（一）等（申付）を

三九

下人主人を打擲致ゆる者

四〇

一 下人として主人越打擲いしゆる者獄門死ニ至り

ゆるとも緝引怪我ニて殺ゆる者斬罪（申付）怪我ニて疵付ゆる

得者徒年鞭三十

四一

一 主人下人を打擲致ゆる者殺ぎ疵ハ御沙汰不及

折傷已上之疵ハ平人打擲（申付）る罪減可申事

〔一八ウ〕

死（申付）不至りゆる得者鞭十八怪我ニ而殺ゆる得者御沙

汰不及ゆる事

四二

妻妾夫打擲致ゆる者

四三

一 妾夫を打擲いしゆる得者鞭十五折傷以上

之疵ハ平人より三等を可加事一目を潰し

四四

若妾ハ夫并妻を打擲ゆる得者又一等を加可申

四五

一 若妾ハ夫并妻を打擲ゆる得者又一等を加可申

四六

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

四七

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

四八

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

四九

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五〇

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五一

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五二

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五三

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五四

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五五

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五六

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五七

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五八

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

五九

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六〇

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六一

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六二

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六三

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六四

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六五

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六六

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六七

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六八

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

六九

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

七〇

一 夫妻を打擲致ゆる折傷以上ニ非連ハ御沙

料

88

一 兄弟姉之身として弟妹を打擲して殺し伯叔父姑之甥姪を打擲して殺し者鞭三拾段我にて殺しハ證據分明ニおめてハ御沙汰ニ不及事

資

89

一 子孫として祖父母父母を打擲致し其并妻として舅姑を打擲いふし者獄門死ニ至り得者銀引極我にて殺し者斬罪

90

一 祖父母父母之子孫を打擲して殺し者鞭十五
一 祖母ハ一等を加ヘ可事但子孫父母罵り或る打し依り囚て打擲いふし死ニ至り得者御沙汰ニ不及我にて殺し者是又同様之事

四一

師匠を打擲致し者

91

一 師匠を打擲致し者平人ニ二等を加ヘ可申事
殺し得者際

四二

父祖人ヲ打擲せら連其子孫返し打し者

92

一 祖父母父母之為に打擲せら連其子孫殺し為返し打し者輕き疵ハ不及御沙汰不及折傷以上致し得者平人打擲より三等を減し可申事
死ニ至り得者定法之如く可為解死人事

四三

盜賊

93

一 盜致し者入墨之上盜取れ高不應し怪重之罪科

可行事

定

一 拾貫文以下

一 拾貫文以上

一 二拾貫文以上

一 三拾貫以上

一 四拾貫文以上

一 五拾貫文以上

一 六拾貫文以上

一 七拾貫文以上

一 八拾貫文以上

一 九拾貫文以上

一 百貫文以上

一 百拾貫文以上

一 百廿貫文以上

一 三拾貫文以上

入墨

鞭三

同六

同九

同十二

鞭拾五

同十八

同廿一

同廿四

同廿七

同三十

徒半年鞭三十

同一年鞭三十

同一年半鞭三十

斬

但此之者罪一等を許

〔二一五〕

〔二一六〕

右錢高を以罪之輕重を定メル義盜取ル品幾

人ニ而分ク而莫分前之高不拘盜取本高を以老

人毎ニ罪を加ヘル事尤從之者ハ一等を減シ可申事

但一時ニ數家ニおゐテ盜取ル節其内只一家之財

多き方を罪を定メ事米穀等ハ時之直段を以錢

ニ直シ品物ヲ直打致させ錢ニ差致可申事

94 一 盜入忍入ル者財物取不申ル得者鞭三入墨免之

但人之士氣を破リ或ハ盜ニ忍入ル次第ニ依リ大盜ノ

95 一 入墨之儀廻し幅三分程に入墨可致ル尤初度

ハ右之腕へ彫リ二度目ハ左之腕へ彫可申ル三

度ニ及ビ得者多少ニ不依斬罪

四四 御城中江入盜致ル者

96 一 御城中江忍入盜い多しル者獄門

四五 自分預之物を私曲致シル者

97 一 御預之物を私曲いし盜取ル者首徒之差別

無之盜取錢高を以罪を定メル事尤幾人ニ

て分ル而も分前之高に不拘盜取ル高を以

一人毎ノ罪を加ヘル事

定

一二貫五百文以下

一二貫五百文以上

一五貫文以上

一七貫五百文以上

一拾貫文以上

一拾五貫文以上

一十七貫五百文以上

一二拾貫文以上

一廿五貫文以上

一三拾貫以上

一拾二貫五百文以上

一四拾貫文以上

入墨 鞭九 (二三ウ)

同拾二

同拾五

同拾八

同廿一

同上

同廿七

同三拾

徒半年鞭三拾

同老年鞭三拾

同老年半鞭三十

同上

鞭二拾四

死罪之代リ徒二年鞭三十

四六 御藏之財物を盜取ル者

98 一 御藏之財物を盜取ル者并御藏廻之者御藏之

財物を私曲いしル者首徒之差別無之盜取

ル之錢高を以罪を定メル事尤幾人ニて別而も

分前之高不拘盜取ル本高を以一人毎ノ罪を

料

資

加江体事

定

入塾
觀六

一五貫文以下

一五貫文以上

一拾貫文以上

一拾五貫文以上

一二拾貫文以上

一廿五貫文以上

一三拾貫文以上

一三拾五貫文以上

一四拾貫文以上

一四拾五貫文以上

一五拾貫文以上

一五拾五貫文以上

一八拾貫文以上

〔二三ウ〕

へ者強盜之御仕置多るへくは但同類之助力
不致者へ竊盜を沙汰可致事

101 若竊盜既よ財物を捨ゆ而逃去ゆを其家人追
懸ゆニ付因之手向致しゆ者へ此律を用科人手
向之律を以刑を加へゆ事

〔二四ウ〕

四八 白昼人之物を掠奪ゆ者

102 一白昼人之物を奪取ゆ者鞭三十若取ゆ高多ゆハ、
竊盜之罪ニ二等越可加事徒之者一等を可減
し事

〔二四ウ〕

103 一難船等之節便よ乘し乱妨い多しゆ者同様之事

104 一喧嘩等いゆし因て財物取ゆ者是又同様之事

105 一巾着切之類へ掠奪ハ無之ゆ竊盜律を以刑を
加へゆ事

〔二四ウ〕

四九 火刑(マ、)

106 一盜之為火を附ゆ者火刑 但燃立不申ゆ者斬
罪

〔二五ウ〕

〔107 欠〕

四七 強盜

99 一追剥強盜之者既よ行ゆ得者財物取不申とも徒
一年半鞭三十既ニ財物取ゆ者同類不殘盜

100 一盜よ忍入ゆ者其家之人江手向いゆし或ハ疵付ゆ

五〇 馬盜

108 一馬被盜賣買いしめ者斬罪

五一 盜枿

109 一盜枿取いしめ者枿取之多少を以御藏之財

物を盜取律を以刑を可加事尤入墨ハ許め事

110 一山師共過木越取め者伐取之過木不殘取上ケ

伐出之多少を罪を可加事前条同様之事

111 一御留山にて柴薪木を盜伐め者過料一貫文

尤伐出之高多く得者錢ニ差殺一倍之過料

可申付事御留山ニ無之共御停木伐荒めもの

右同様之事

112 一山中伐荒有之科人相知不申節者伐荒之多

少以山下村過料可申付め事

113 一無極印之材木賣買いしめ者取上之上盜

物を存な可ら賣買致め律を以刑を加へ過き事

〔114 欠〕

五二 流失流木盜上め者

115 一出水之節流失流木取上め者見分之上五箇一

山師ヲ相渡可申め若隱匿被見出め者隱木多
少を以過料為差出め事

定

一拾本以上 二百

一拾本以上 一貫文

一二拾本以上 一貫八百文

一三拾本以上 二貫四百文

一四拾本以上 三貫文

一五拾本以上 三貫六百文

一六拾本以上 四貫三百文

一七拾本以上 四貫八百文

一八拾本以上 五貫四百文

一九十本以上 六貫文

一百本以上 六貫六百文

七貫二百文

野畑之穀を盜取め者

116 一田野之穀物を盜取め者竊盜ニ準し多少を以

罪を定め事但入墨同様之事

117 一柴草木石之類人功を以伐取積置めを擅ニ
取め是又同様之事

〔二六六〕

〔二六七〕

料

五四（一） 夜中無故人之家ニ入ル者

118 一夜中無故人之家ニ入ル者鞭三若其家人即時

ニ殺ル者御辨無之若又既ニ捕置擅ニ打擲

資

イ多シ疵付ル平人打擲ル二等を減シ罪ニ
行ヒル事死ニ至リル得者鞭三拾（二七才）

五七

入墨を被取ル者

123 一盜をいッし入墨ニ被行ル者其後密ニ拔取
ル者鞭三入墨仕直シ可申事

ゆもの斬

五五

盜之宿致シル者

119 一強盜之宿いッしル者其身不行ルとも財物を分取
ル得者礙財物を取不申ル得者徒一年半鞭三十

五八

謀書謀判致ル者

124 一御印并奉行諸人之判を似せ造リ（二八才）
取ル者獄門未財物不取者ハ死罪一等を減可申事

120

一竊盜之宿致シル者財物分取ル得者其身不行ル
とも竊盜之首と可為同前事財物取不申ル得者

125

一似せ印形を似せ手紙或ハ古手形を取拵出私物を
取ル者竊盜ニ準シ錢の高を以罪科之輕重を

121

一強盜竊盜之物を存ナ可買ル者品錢ニ差
一等を減シ可申事入墨同様之事

126

一語らひ手段ニテ取ル者是又竊盜同様之事
入墨免之

積竊盜律二等を減シ罪ニ行ル事存預

置ル者又（二七才）等を減シ事但品物之高多く共鞭

127 一物取無之申訳之多め有合之印形押ル類ハ竊盜
ニ準シ一等減シ可申事入墨免之

本人江返可申ル事

五六

勾引

五九

役人を似せル者

122 一手段を設ケ人を勾引ル者鞭三十因テ疵付

128 一在々通り役人を似せ往來人馬斯等差出させル者
鞭三十（二八才）

六〇

似金銭を造偽者

129 一似金銭を造り并私に錢を鑄偽者假細工人同罪

其餘加談之者ハ死罪一等減シ可申事但似金を存そんじなから通用致偽者は又同様の事

賄賂

六一

枉法賄賂之事

130 一賄賂を受託する事を致偽者錢之高を極重之罪科可行事尤幾人より受偽而も惣錢押合せ

其高を定偽事若枉偽事重く偽得者人之罪を輕重い多し律を以刑を可加事

定

一五貫文以下

額六

一五貫文以上

同九

一拾貫文以上

同十二

一拾五貫文以上

同十五

一二拾貫文以上

同十八

一二拾五貫文以上

同廿一

一三拾貫文以上

同廿七

一三拾五貫以上

同廿四

(二九オ)

六二

不枉法賄賂之事

131 一頼を請錢を取偽者枉偽事無之者ハ惣錢之高押合半分ニして罪を定偽事但幾人より受偽得者半分ニ不致事

定

一拾貫文以下

額三

一拾貫文以上

額六

一貳拾貫文以上

同九

一三拾貫文以上

同十二

一四十貫文以上

同十五

一六拾貫文以上

同廿一

一七拾貫以上

同廿四

一八拾貫文以上

同廿七

一九拾貫文以上

同三十

(三〇オ)

六一

似金銭を造偽者

129 一似金銭を造り并私に錢を鑄偽者假細工人同罪

其餘加談之者ハ死罪一等減シ可申事但似金を存そんじなから通用致偽者は又同様の事

賄賂

六一

枉法賄賂之事

130 一賄賂を受託する事を致偽者錢之高を極重之罪科可行事尤幾人より受偽而も惣錢押合せ

其高を定偽事若枉偽事重く偽得者人之罪を輕重い多し律を以刑を可加事

定

一五貫文以下

額六

一五貫文以上

同九

一拾貫文以上

同十二

一拾五貫文以上

同十五

一二拾貫文以上

同十八

一二拾五貫文以上

同廿一

一三拾貫文以上

同廿七

一三拾五貫以上

同廿四

(二九オ)

六二

不枉法賄賂之事

131 一頼を請錢を取偽者枉偽事無之者ハ惣錢之高押合半分ニして罪を定偽事但幾人より受偽得者半分ニ不致事

定

一拾貫文以下

額三

一拾貫文以上

額六

一貳拾貫文以上

同九

一三拾貫文以上

同十二

一四十貫文以上

同十五

一六拾貫文以上

同廿一

一七拾貫以上

同廿四

一八拾貫文以上

同廿七

一九拾貫文以上

同三十

(三〇オ)

六三

似金銭を造偽者

129 一似金銭を造り并私に錢を鑄偽者假細工人同罪

其餘加談之者ハ死罪一等減シ可申事但似金を存そんじなから通用致偽者は又同様の事

賄賂

六一

枉法賄賂之事

130 一賄賂を受託する事を致偽者錢之高を極重之罪科可行事尤幾人より受偽而も惣錢押合せ

其高を定偽事若枉偽事重く偽得者人之罪を輕重い多し律を以刑を可加事

定

一五貫文以下

額六

一五貫文以上

同九

一拾貫文以上

同十二

一拾五貫文以上

同十五

一二拾貫文以上

同十八

一二拾五貫文以上

同廿一

一三拾貫文以上

同廿七

一三拾五貫以上

同廿四

(二九オ)

六二

不枉法賄賂之事

131 一頼を請錢を取偽者枉偽事無之者ハ惣錢之高押合半分ニして罪を定偽事但幾人より受偽得者半分ニ不致事

定

一拾貫文以下

額三

一拾貫文以上

額六

一貳拾貫文以上

同九

一三拾貫文以上

同十二

一四十貫文以上

同十五

一六拾貫文以上

同廿一

一七拾貫以上

同廿四

一八拾貫文以上

同廿七

一九拾貫文以上

同三十

(三〇オ)

六四

似金銭を造偽者

129 一似金銭を造り并私に錢を鑄偽者假細工人同罪

其餘加談之者ハ死罪一等減シ可申事但似金を存そんじなから通用致偽者は又同様の事

賄賂

六一

枉法賄賂之事

130 一賄賂を受託する事を致偽者錢之高を極重之罪科可行事尤幾人より受偽而も惣錢押合せ

其高を定偽事若枉偽事重く偽得者人之罪を輕重い多し律を以刑を可加事

定

一五貫文以下

額六

一五貫文以上

同九

一拾貫文以上

同十二

一拾五貫文以上

同十五

一二拾貫文以上

同十八

一二拾五貫文以上

同廿一

一三拾貫文以上

同廿七

一三拾五貫以上

同廿四

(二九オ)

六二

不枉法賄賂之事

131 一頼を請錢を取偽者枉偽事無之者ハ惣錢之高押合半分ニして罪を定偽事但幾人より受偽得者半分ニ不致事

定

一拾貫文以下

額三

一拾貫文以上

額六

一貳拾貫文以上

同九

一三拾貫文以上

同十二

一四十貫文以上

同十五

一六拾貫文以上

同廿一

一七拾貫以上

同廿四

一八拾貫文以上

同廿七

一九拾貫文以上

同三十

(三〇オ)

料 一百貫文 以上 徒半年 鞭三十

一百五十貫文以上 同十八 (三〇ウ)

一百十貫文以上 同老年 鞭三十

資 一百式拾貫文以上 同一年半 鞭三十

六三 坐贓之事

132 一差而頼合も無之通例只財を受ゆ類ハ坐贓之

罪ニ可行事尤惣錢半分致ゆて罪を定ゆ事

前条同様之事尤與へゆ者三等を減しゆ事

定

一拾貫文以下 戸メ 廿日

一拾貫文以上 同 三十日

一式拾貫文以上 鞭 三 (三二ウ)

一三拾貫文以上 鞭 六

一四拾貫文以上 同 九 三拾貫文以上

一五拾貫文以上 同 十二 鞭 六

一六拾貫文以上 同 十五

一七拾貫文以上 同 十八

一八拾貫文以上 同 廿一

一九拾貫文以上 同 廿四

一百貫文以上 同 廿七

一百式拾貫文以上 同 三十

六四 賄賂之約諾致しゆ者 (三一ウ)

133 一賄賂之約諾いしゆ者財物未手ニ入不申ゆ共事

を枉ゆ者ハ枉法ニ準し一等越減し罪ニ行ひ可申

事約諾而已まて未事越枉不申ゆ得者不枉法ニ

準し可申事

〔六五 欠〕

134 一卜之者願事有之賄賂を行ひゆ而法を枉ゆ事

を得ハ差出ゆ錢高を以座贓之律ニ當之刑を

可加事尤枉ゆ事重きゆ得者重き方よて沙

汰可致事若上ミゆる者強くゆ得者無減差出ゆ

ハ御咎無之

六六 茂合取立私曲致ゆ者 (三二ウ)

135 一茂合錢差出させ私曲いしゆ者枉法を以罪ニ

行ゆ事音信ニ用ひ自分遣ひ不申ゆとも同

様之事

六七 田宅
隠田畑

136 一 隠田畑いしゆ者一反歩より五反歩迄ハ鞭

六五反歩毎々一等を加へ可申事但隠田畑御

取上隠ゆ反畝一年之年實可令出事

137 一 御換見之節悪地など振替見せゆ者右之格にて

一等を減可申事尤反畝多くとも鞭十五にて

許可申事村役之者乍存見適に致置ゆ者

ハ本人同罪之事若不存ゆ得ハ五反歩以

下ハ許之五反以上ハ右之格にて三等を減可

申ゆ尤反畝多ゆとも鞭九にて許可申事

六八 田畑質入

138 一年季を以質入いしゆ田地年季相済本人

より元利返済請戻しを求め得とも外事託し不

相返年來押領致ゆ者雖三年來之小作米可令返事

六九 田畑之押領

139 一 他人之田畑を事々依り押領いしゆ者屋節を

一軒田畑ハ一反歩を五反歩まで鞭三五反毎々一

等を加へ可申事尤反畝多ゆとも鞭十八ニ而答旨敷
可致事但年來之小作米令返事同様之事

倉庫

七〇 御收納之遲滞

140 一 御收納ハ年々十一月晦日迄皆済可致事若翌正

月迄無故して皆済無之者ハ御取之高十分割一分

滞ゆ得者戸々廿日一分毎々一等を加可申事村

役同様之事尤鞭九まで許可申事

七一 内借

141 一 御藏廻之者御藏之米錢を内借いしゆ者米錢

之高を以竊盜ニ準罪ニ行可申事若掛合之者

ニあらし連ハ一等を減し可申事但入墨免之

142 一 器財之類自分物を以取替ゆ者同様之事

訴訟

七二 手越ニ訴状差出ゆ者

143 一 訴状を差出ゆ者其向ニ支配頭江差出可申事手

越いし奉行御役人江差出ゆ而も取上申敷事

料

若願難相成儀を強而手越ニ出得者戸ノ三十日但

願可相立筋を取押置或ハ支配頭ニ而非道之取扱〔三四才〕
有之儀を訴ハ類ハ可為格別事

資

七三 無名之訴状

144 一 無名之訴状投文いししハ鞭三訴状之趣取上
沙汰致聞敷事

七四 不實之事を致訴状ハ者

145 一 不實之事を申出人を罪ニ落さんとする者鞭

刑ニ可被行事を訴ハ得者則申出ハ者鞭刑多るヘし追
放ニ可被行事を訴ハ得者可為追放事若死罪ニ

可相成義を訴ハ得者徒一年半鞭三十

146 一 若被訴ハ人御沙汰既極リ其罪被行ハ後不實之事〔三四才〕

願ハ得者罪ニ被行ハ者之刑ニ一等を可加事死

罪ニ被行ハ得者可為解死人事

147 一 若二ヶ條訴ハ者輕き事ハ実ニ重き事ハ偽リ

或ハ一事ニ而も輕き事越重ク申出ハ者鞭數之内実事
之分を差引殘る鞭數を以刑を行ハ事

七五

親族相訴ハ者

148 一 子孫として祖父母父母之事越訴妻として夫并
舅姑之事越訴ハ者鞭三十虚説搆裁許を願
ハ者斬罪

149 一 伯叔父姑兄姉之事を訴ハ者鞭十五訴ハ事

偽リハ得者平人より罪三等越加ヘ可申事但被訴ハ者
科人自身申出ハ律と同様之事若伯叔父姑兄姉
非道之儀有之不得止事申出ハ得者可為格別事

七六 子孫父母之教を背ハ者

150 一 子孫として父母之教ニ違ハ或ハ養育缺儀有之
者鞭十五但父母之申出ニ依刑を加ハ事

七七 訴訟之腰推いしハ者

151 一 訴訟之腰推いし或ハ人の為に訴状を作リ人を
罪落さんと致ハ者本人同罪之事

七八

強訴

152 一 願難相成儀を大勢徒堂をいしし支配頭之差割を
不用強訴ニおるてハ其棟梁致ハ者鞭廿四加減

致し者一等懲可事其餘一通之條ハ時味之上容赦可致事

連上

七九

隠津出

153 一 隠津出致し者品物取押鞭十五相對いし取試りし者

過料者貫貳百文

但米貳百俵已上之隠津出ハ家屋敷家財隠所所押

可致事

154

一 米留有之條節無手形米隠出し者鞭六駄賃附

し者過料一貫貳百文

〔三六才〕

八〇

隠荷揚

155 一 旅船隠荷揚致し者品物取押相對致し者出量

鞭六家業取放し事

八一

隠商賣

156 一 隠商賣いしし者品物取押過料錢為差出し事

但過料之定別帳戶數方條例有之

雜犯

八二

博奕

157 一 博奕いたしし者鞭三其場之金錢ハ没収可致事

但宿いしし者可為同罪事尤其場ニ居合せし者〔三六才〕

之外同類有之ゆとも一々突篋ニ不及事

但隠き引手ニかるゝ等致し者戸メ三十日

八三

御用事越頼合致し者

158 一 御用事曲て頼合致し者戸メ廿日頼し者并

頼を受ゆもの同罪之輩若支既ニ施行ひゆ得ハ

頼を受ゆ者ハ鞭六頼申し者其親戚朋友之為

ゆ得ハ二等を減へし自己之為ニゆ得者本罪之上ニ

一等を加ゆ尤曲候事重くゆハ人之罪を輕重

致し律を以刑を加へし事は可為ニ賄賂を取ゆ得ハ枉

法之律を以刑を可加へ事

〔三七才〕

八四

人之罪を以輕重し者

159 一 依估量負を以人之罪を輕重致し者其増減

致し處を以其分之罪を加し事若或ハ全く隠し

或ハ全く偽りゆ得者其本罪を以刑を加し事

料 八五

失火

160 一失火致ゆる者戸ノ廿日類違有之は得者三十日

囚之人を就死は得者類十五但一家之内誰にても

資 手過致ゆる者へ刑を加へぬ事

御宗廟并御城等へ類違及も得者徒一

年半類三十

〔三七ウ〕

161 一諸役所并御蔵之内ニおゐて失火致ゆる者廿四

八六 野火

162 一山野江火を附ゆる者類三番本人相知違不申は得者

其領分之村所ニ而過料為差出ぬ事

但過料之定部方別帳條例有之

八七 御觸ニ背ゆる者

163 一御觸ニ背ゆる者事之輕きハ戸ノ十五日重きハ三十日

八八 不為儀を致ゆる者

164 一不可為儀を致ゆる者輕きハ戸ノ廿日重きハ類三

此ケ条之儀元來重罪ハ律ニ正しきケルナク

は得共證事に至り事變高端を案ニ難違ぬ間

〔三八ウ〕

右條之儀二等に分此ケ条を以沙汰可致事

一一六

八九 科人手回致しゆる者

165 一科人逃走リ捕手之者へ手回致ゆるもの本罪

之上ニ二等を可加事尤人ニ証付折辱已上至は得者

斬罪

九〇 科人出奔

166 一牽破り并預リ之内純解出奔致しゆる者本罪二

等違可加事

167 一預ケ者不覺めて取逃ゆる者預リ人并番人江三

三十日之内ニ捕ゆる候申付若取兼は節ハ科人之罪

三等減〔三八ウ〕

し可申事態と逃ゆる者科人同罪

九一 科人を隠ゆる者

168 一科有之御灸之者存隠し置或ハ其事を告

知らせ逃しゆる者科人之罪ニ一等を可減事

九二 私ニ升替を造ゆる者

169 一私ニ升替等を作り并運用升を著しいし奸曲

いしし者鞭六

九三

御関所を忍通ひ者

170 一御関所忍通ひ者鞭九山越を致しものハ鞭十二

九四

立歸者

〔三九オ〕

171 一科有之御沙汰之上追放ヒ仰付ル者御歸之地へ

立歸ル得者鞭三元之如く追放可致事

172

一惡事有之他國江出奔いし其後立歸忍居

ル者本罪より一等を加へし但本罪輕くハ、御関

所忍通ハ罪ニ一等越可加事

173

一惡事無之出奔いし後立歸ル者御関外へ出不

申ル得者過代役廿日

九五

馬札紛失

175

一馬札紛失いし得者過料一貫文

174

一無札馬賣買いし者鞭三

〔三九ウ〕

犯案

九六

妾淫

176 一妾淫之者ハ鞭九男女同罪參る惡事夫有之

者ハ鞭三十

177 一強姦之者ハ徒一年鞭三十未成者ハ鞭三十

178 一幼女拾貳歳以下を姦しル者強姦同様之罪

179 一妻女を許めて姦を致せル者本夫姦夫姦婦何

連茂同罪之事右何連も姦所ニおめて見届隨

なる證據有之夫或ハ親族より申出ニ寄沙汰可致

事外より訴ル類ハ御取上無之

〔四〇オ〕

九七 僧尼犯姦

180 一僧尼犯姦ル者平人犯姦之罪ニ一等加へ還俗為

政ル事相姦しル者平人妾淫之罪ニ行ル之事

九八 下人家長之妻女を姦しル者

181 一下人主人之妻女を姦しル者斬罪妻女一等を減

可申事

九九 相對死

182 一男女申合相果ル者子細無之ハ得者死

〔五三オ〕

一女を

料

先ニ殺し男存命ニ得者下手人男相果女
存命ニ得者解死人ニ不及三日肆し^{〔七〕}乞食手へ〔四〇ウ〕
相渡可申事

資

183 一男女共ニ疵斗^{〔八〕}て存命ニ得者是又三日肆し^{〔九〕}以上
乞食手渡之

184 一主人下人と申合相果^{〔一〇〕}者下人相果主人存命ニ得者

解死人ニ不及乞食手渡之主人相果下人存命
ニ得者獄門

一〇〇 隠遊女

185 一御免場所之外隠遊女抱置渡世い^{〔一一〕}し^{〔一二〕}者^{〔一三〕}三

〔四一オ〕

覚

科人片付之儀區々之沙汰有之^{〔一四〕}ニ付此度御刑
法沙汰被 仰付之申出之趣被遊

御聞届猶又以 御自筆被 仰出^{〔一五〕}間致勘

弁批判遂穿^{〔一六〕}察勸善懲惡相成^{〔一七〕}様沙汰有
之^{〔一八〕}誨^{〔一九〕}旨四奉行能々可被申合^{〔二〇〕}以上

三月

御家老

御自筆之寫

一一八

〔四一ウ〕

右法限沙汰之通申付^{〔二一〕}一^{〔二二〕}辨御刑法之儀兼而一
定之上ニ得共猶其時宜依り輕重之沙汰も可有之

事^{〔二三〕}且箇條ニ適當之罪人有之^{〔二四〕}一君

臣之義立而父子之親ニ本付總而人倫之義^{〔二五〕}を

其時々沙汰い多し^{〔二六〕}様依必しも其箇條ニ不

可泥事

三月

寛政九丁巳年三月被

仰出之

〔四二オ〕

本書は、弘前市立弘前図書館の目録には、

〔寛政律〕

GK三三二・五一二八五

写一冊 半紙 和

とある〔若見文庫郷土資料総目録〕昭和五七年二月、七九
頁。

本書の体裁は、縦二四・五センチ、横一七・五センチで、半紙を二つ折にして袋綴じしており、本文四二丁に、表紙も同じ用紙で、右端の上下二カ所をこよりで一センチ前後の幅で綴じ、裏で結び切っている。裏表紙はない。

表紙には、示したとおり、「明律台刑」と二行並記しており、これらは本来「明律管刑」とあるべきものだが、表題とはい言いがたく、単なる習書といえよう。ただし右側はあとで書いたらしく、墨は薄くかすれている。したがって表題を有しないものである。

裏表紙はないが、四二丁裏白の左端、綴部に「明末三月中新」および異筆で「九月」と記すが、意味するところは不明である。なお明治四年は未年にあたる。筆はあるが、朱書その他の書き入れはない。

本文は各片面十行に流麗な筆でしたためられ、虫損は少ないが、表紙を欠くための痛みが目立つ。誤字・脱字についての補筆はあるが、朱書その他の書き入れはない。

表紙の右肩にはられたラベルには「岩見文庫／二／10／14」とあり、これの左肩に一部かかって現在の配架ラベル「GK/322.5/285」が貼られている。本文第一丁表の右上辺に「岩見文庫／G20587／弘前図書館」の印が捺されているのみで、作

成・伝来の経緯を示すものは、他に見られない。

本文の中で主な異同にふれておくと、本文の条文を欠くのは50条・107条・114条、項目名を欠くのは六五である。六五の項目名を欠くのは既報告の(二)のみで、50を欠くのは(七)、107を欠くのは(三)(五)(六)(七)(八)(九)(十一)(十二)、114を欠くのは(七)(八)(十)である。本書に近いのは(七)であるが、(七)では二七・四五の項目名を欠くのみならず六五の項目名を有し七六(150条)を欠く。なお、ともに寛政九年三月の家老名義の「覚」と「御自筆之写」を有する。

九五は115・114条の順である。条文番号は(二)に付したのを踏襲しているため問題を生じたが、もとより項目名「馬札紛失」との関係では115条が前にあるのが自然である。本書と同様なのは(四)(十)である。(二)と同じ114・115条の順であるのは(七)のみである。114条を欠くのは(三)(九)(十一)(十二)で、(十二)以外は項目名を「馬札紛失之事」とする。また(三)は115条の後に「点羽二日、馬札無之馬隠置所持致者、鞭」との記載があり、これも114条が後補なることを推測させる。

本稿は、大阪経済法科大学一九九〇年(平成二年)度研究奨励金による成果の一部である。

料

付8 『御用格』二十一 (国立史料館所蔵)

凡例

資

- 一 国立史料館所蔵本(陸奥国弘前津軽家文書 一五九)を用いた。
- 一 本書の後半は虫損のため閲覧禁止となっているので、閲覧可能部分のみを翻刻した。
- 一 字体、字配りはできる限り、原本に従った。異体字・変体仮名については必ずしも原本に従ってはない。
- 一 仮項目番号一、二、三、……および各件番号1、2、3…を付した。
- 一 各項目、各件の前をそれぞれ一行空けた。
- 一 原本の丁数および表裏を各終行末に「」で示した。
- 一 各丁片面八行で記されており、念のため空白行数を「」で示した。
- 一 他に適宜書き加えた箇所も「」で示した。
- 一 読点を適宜に施した。

130

従文政八年
至弘化四年
御用格二十一

(縦23.4cm 横17.2cm)

卷ノ二十一

凶事

發居「四」

盜賊召捕「七」

被

仰出「二」

御役下「十三」

遠慮諸事「四十一」

附 御談議

追放「二十二」
附 送返町様

閉門

「五」

通靈

「一」

一聞所

儀絶勘當和談「三十一」

御預

「十一」

他出差留「三十」

御暇

「二十四」

蜂高

「二十七」

谷人御園下

「三十七」

附公義御呼出共

御仕置「四十」

〔五行分卒白〕

〔入牢〕
〔出牢〕
〔三十八〕

〔一ウ〕

〔二八三〇〕
天保元年七月十日

一釜泡源左衛門申出、山鹿次郎作

候中江罷越の旨被及御聞、委細

書付を以申上の様被 仰付は処、前々

罷越、義無之、御用ニ付御礼廻ハ之節

者、取次を以由禮、勝手杯へ罷通、義

無御座ハへハ、此度限見舞ハ可仕筋無之、

三奉行之義者御役柄之儀ニ付、重役者

勿論、親族ニ而も遠慮候ハ之族へ

罷越不申義者、三奉行一同〇〇、

右妹之族へ決而罷越不申旨、

御聞届被 仰付旨申遣之、

〔三六〕

同廿三日

一須藤孫藏、御代官勤中、扱向不直、

賄賂ハ申受、百性共願筋扱不致義も

有之旨、詮議之處、い細申出、手代共

引負并割返錢還滞有之ニ付、御用

透中事替ニ可取糺所存之處、

〔三ウ〕

2 同年六月七日

一遠慮候共 御免被 仰付、伺遠慮

之義者、夜分何時ニ而茂則夜差出ハ様、

日記夜并右筆へ心得申付之、尤

〔一ウ〕
〔二ウ〕
〔三ウ〕
〔四ウ〕
〔五ウ〕
〔六ウ〕
〔七ウ〕
〔八ウ〕
〔九ウ〕
〔一〇ウ〕
〔一一ウ〕
〔一二ウ〕
〔一三ウ〕
〔一四ウ〕
〔一五ウ〕
〔一六ウ〕
〔一七ウ〕
〔一八ウ〕
〔一九ウ〕
〔二〇ウ〕
〔二一ウ〕
〔二二ウ〕
〔二三ウ〕
〔二四ウ〕
〔二五ウ〕
〔二六ウ〕
〔二七ウ〕
〔二八ウ〕
〔二九ウ〕
〔三〇ウ〕
〔三一ウ〕
〔三二ウ〕
〔三三ウ〕
〔三四ウ〕
〔三五ウ〕
〔三六ウ〕
〔三七ウ〕
〔三八ウ〕
〔三九ウ〕
〔四〇ウ〕
〔四一ウ〕
〔四二ウ〕
〔四三ウ〕
〔四四ウ〕
〔四五ウ〕
〔四六ウ〕
〔四七ウ〕
〔四八ウ〕
〔四九ウ〕
〔五〇ウ〕
〔五一ウ〕
〔五二ウ〕
〔五三ウ〕
〔五四ウ〕
〔五五ウ〕
〔五六ウ〕
〔五七ウ〕
〔五八ウ〕
〔五九ウ〕
〔六〇ウ〕
〔六一ウ〕
〔六二ウ〕
〔六三ウ〕
〔六四ウ〕
〔六五ウ〕
〔六六ウ〕
〔六七ウ〕
〔六八ウ〕
〔六九ウ〕
〔七〇ウ〕
〔七一ウ〕
〔七二ウ〕
〔七三ウ〕
〔七四ウ〕
〔七五ウ〕
〔七六ウ〕
〔七七ウ〕
〔七八ウ〕
〔七九ウ〕
〔八〇ウ〕
〔八一ウ〕
〔八二ウ〕
〔八三ウ〕
〔八四ウ〕
〔八五ウ〕
〔八六ウ〕
〔八七ウ〕
〔八八ウ〕
〔八九ウ〕
〔九〇ウ〕
〔九一ウ〕
〔九二ウ〕
〔九三ウ〕
〔九四ウ〕
〔九五ウ〕
〔九六ウ〕
〔九七ウ〕
〔九八ウ〕
〔九九ウ〕
〔一〇〇ウ〕

遠慮 仰付、義、御沙汰次第、

但、山本三郎左衛門候 御免、自分遠慮

之節、本文之通ニ 仰付、

3 文政十二年十二月廿六日

一於取上村御仕置場申渡之儀、此度ハ

檢便之ニ字書入ハ様ニ 仰付、

〔三二〕

料

右躰御扱相成、恐入の旨申出之越、
此度者承届、尤他出差留

御免被 仰付、尚又同人義先頃

資

病死い多し、ニ付、悴勝弥江可申付旨
申遣之、

6 文政十年十二月廿六日

一三奉行申出、他領もの疑敷筋有之

〔三〕 野内御關所口を返送之節者浅虫村領

〔三二〕

鍵懸境ニ而追放之由ニ付、直様立様又、

送返ニ相成、ものも有之趣相聞得、不締ニ付、

以采村継ニ而野内御關所口を返送ニ相成、者

ハ、浅虫村を平内領土屋村迄相送り、夫を

段々村継を以、符場沢迄送届、處ニ而、

同所番人吟味之上、已采御當領入込不申

様、其外右ニ付三奉行沙汰い細有之、

7 天保二年八月廿四日

一今日津輕主水江相渡り書取、左之通、

〔四ウ〕

一三二

渡邊將監召仕仲間頭権四郎
与申もの、南部もの有之を
用達ニ取立之処、故障之儀有之、

暇差遣、得共、兎角長屋之内

忍參、旨相聞得、右之者以後

決而取寄不申様、尚家來召

抱木之節者可被逐吟味

八月

八月

8 文政八年十月廿五日

一報恩寺申出、昨夜盜賊入込、御寄

附之金屏風と盜取、ニ付、以

御威光御詮議被仰付度儀委細

申出之通、郡奉行町奉行九浦

町奉行江申遣之、船々御詮議之儀

改而八浦町奉行江申遣之、

9 天保元年七月十七日

一此度慎被 仰付、面々江罷越、御尋

被 仰付、議ニ付恐入、御奉公遠慮伺差出、付、

〔五ウ〕

〔五オ〕

被 仰付之有無評議可仕旨被 仰付、ニ付、

段々御先格相礼比得共、為差類例也

無御座、依之得与相老比処、先上下共ニ

信実を以可相交与兼而被 仰出御座比

然ニ親友并恩顧有之家 安

盛之内者親茂深く致比得共、殿敷御呵

ホ被仰付、へへ、兎角是迄親き中も何与

なく疎遠ニ成勝ニ而、是全信實之交ニ

無之様奉存、假令親族ニ無之共、師弟之

間并旧來之恩顧互ニ不致忘却面々ハ、

重き閉門な、遠、懐中江相尋、義、御

答被 仰付、ハ、人情弥信実を取失比禮

成行可申哉奉存、只是迄之任來

を以何連茂相尋比事ニ相聞得比間、

何与なく御聞流しニ被 仰付、様奉存、

是迄御例無之義者、親族之外相見舞、

義急度不相成、様被 仰付、ハ、交之信

義薄く可相成哉、又往來不苦様ニ被

仰付、ハ、不揮 上之御威光輝く、

相成可申哉、右之詠合ニ而是迄何共

〔六之〕

〔六之〕

被 仰付無御座哉奉存、乍去御側向

相勤、面々ハ、兼而被 仰出も有之由へハ、

御医者多り共斟酌も可有之、若引請比

病人ハ御座比ハ、瘵之上御沙汰次第

可仕義、矢嶋玄碩ハ心得違与奉存、間、

遠慮伺之通可被 仰付哉、奈良岡憲藏

義者見舞与乍申、日々往來不悞

上を致方ニ付、遠慮伺之通可被

仰付哉、其外之面々ハ伺書御返可被

仰付哉之儀、御用人沙汰之通、

〔七之〕

10 天保九年四月十七日

一日記役申出、御役被召放、慎被 仰付、

其後隠居爲居、且知行被減御役ホ

被 仰付、節者、親類遠慮伺差出ニ不及、

文政四年九月被 仰付御座比得共、

御役被召放比後、永之御暇已上之重キ

御呵被 仰付、節、親類遠慮有無之儀

不分明ニ付、已不初メ被召放比親類

遠慮伺之通被 仰付、而も、其後永之

〔八之〕

御殿已上之重幸御阿被 仰付、節も、改節
親類遠慮伺差出の様可被仰付哉之儀、
伺之通、

右之通此度改而被 仰付、間、右之心得ニ而
以來取扱の様被 仰付、

〔九五〕

11 天保元年五月十二日

12 天保九年八月十一日

一 御出之節出火有之由へハ、火元御定方

慎日数相増の儀、三奉行江評議

〔八ウ〕

被 仰付、處、是迄者一定致、義無之ニ付、

以來左之通、

一 御出之節、

御通筋出火有之由へハ、是迄之御定方

十日増慎戸メ之事、

但、類焼有之日数相増の由も、右ニ
不拘十日増之事、

〔九オ〕

一 御帰之節同断、

但、御供引取後之出火者、是迄之

御定方^{〔よ〕}より七日増慎戸メ之事、

一 御通筋真町五丁四方出火へ、是迄之

御定方七日増慎戸メ之事、

但、御供引取後之出火者、是迄之
御定之通之事、

二 糞居

〔二四〕 〔七行分空白〕

〔一一ウ〕

〔裏八行分空白〕

〔一一ウ〕

〔六行分空白〕

〔一〇オ〕

申遣之、

御締合相立の様被 仰付、尤類焼有之

〔一〇オ〕

節者是迄之通急度慎申付の様被

仰付旨、郡奉行町奉行九浦町奉行江

類焼無之共、村預入寺ホニ而慎被

仰付居由得共、失火ニ而自分宅斗焼失

之節者、已後入寺ニ而慎申付、ニ不及の様

被 仰付、間、尚以火之元ホ之義者、格別念入

御締合相立の様被 仰付、尤類焼有之

節者是迄之通急度慎申付の様被

仰付旨、郡奉行町奉行九浦町奉行江

申遣之、

〔六行分空白〕

〔一〇オ〕

三 閉門 通器

〔七行分空白〕

〔一五〕

〔真八行分空白〕

〔二二ウ〕

四 盜賊召捕

13 天保元年八月七日

一 三奉行申出、土藏破り乱心もの并

盜賊火付人殺ハ之もの見當次第、

乞食共取押之義ニ付、此度改而左之通

被 仰付ハ、

一 盜致、もの、町目付共ニ而名前告知せ

捕方申付置ハ分、并他領之ものニ而

盜又ハ不法ハい多し送返被 仰付、

節、面跡見知せ度分者、後日入込ハ、

是迄之通捕申出ハ様、

一 町目付共申付無之ものニ而も、火

付又者大盜ニまされ無之、隨成義

見當ハ、前書之通扱、様、

〔一三オ〕

一人殺又者乱心狂氣之ものニ而、刃物

ヲ投散し、從來之もの危相見

得、ハ、捕ル而致寄之村役町役へ

相渡し、其旨申出ハ様、右何連業

廻リ先ニ而見當、ハ、取扱ハ様、尤在

町之もの共、其場へ寄集縛リ置、

義者格別、我共ニ而繩付、致致遠

慮ハ様、

一 惣而帶刀之ものニハ、捕押ハ之扱

可為無用、

一 右ニ付、御家中并在町江、左之通、

一 御家中ニ而不届之筋有之、打捨ニ

致、分ハ格別、人殺并乱心狂氣ニ而

刃物ヲ投散し、人を危めル者見當、

ハ、誰ニ而も捕押可申答、問、以業

右跡之もの見當、ハ、早速捕押、

其旨銘、頭方へ申出、頭方ル其筋江

申出ハ様、

一 右捕押之義ハ、家来末ニ至迄

〔一三ウ〕

〔一四オ〕

〔一四ウ〕

能、申付置は様、下、ニは共、早速捕

押は節者、其仕振ニ寄、御褒美可被下、

一右躰之もの有之節、見當は而も懸居

未練之義於有之へ、後日相願は共、

急度御礼明可被 仰付、間、其旨可被

差心得、

〔八〕一右捕押、もの有之節、武家屋敷

前ニはハ、其所、主人、江、又ハ用違ハ

有之節、ハ用違成共、差出友、扱

致せ、尚又不届之ものハ月番町奉行江

相渡、様、尤在町はハ、其向寄之村役

町役へ預置、其旨共申出は様、

右之通御家中へ御觸出被 仰付は様、

一意外もの有之、打捨ニ致、分ハ格別、

人殺又ハ乱心狂氣之もの有之、刃物

ハ被放し人を危メは類、并阿ふれ

もの有之節、見當次第、早速召

捕可申出、無其儀、乞共共へ申付、捕、

濃間、有之旨相聞得、心得違之致方ニ

〔一五五〕

〔一五五〕

有之、假令刃物ハ被放しは共、大勢ニ而

捕押、ハ、不相叶、義無之旨ニ付、何

速或早速捕押、其旨申出は様、謹ニ

而茂捕押、ものへハ、其仕振ニ寄

御褒美可被下、

〔一六〇〕

一村役町役共義、右躰之もの有之節

ハ、近連之もの共呼集、而成共、早速

捕押、其旨申出は様、

一右ニ付、御家中御觸出被 仰付儀も有之、間、

諸士之節、右躰之もの捕押、預ケハ之儀

申付、ハ、違背不致、猶又不届之もの

ハ不取波、様、克、手當致置は様、右之趣

在町江御觸出被 仰付、様、い細沙汰之通、

〔一六五〕

〔七〕

〔七行分空白〕

〔一七〇〕

〔八行分空白〕

〔一七五〕

五 御 預

14 文政八年六月廿七日

一益泡福次郎申出、株御詮議之筋

有之、他出差留、御預被 仰付、問、諸勤
引取伺之通、

但備次郎親源左衛門、此節江戸詰ニ付、

諸勤引取伺之通ニ 仰付、後例ニ

不相成、事、

〔十一〕

〔二八才〕

15 天保九年八月二日

一 御徒目付、對馬茂次郎儀、詮議之筋

有之由問、手錠之上、唯今評定所へ

相詰ゆ様、尤家内之義者手錠之上

親類佐野仁助江御預、家財兩目

付封印申付、猶又家番大組諸手

足押之内式人、右上册御徒目付

宍人申付、其外家内之ものへ途中

兩目付一人ツ、附添之義、并評定所

御兩人へ被 仰付方之義共、い細有之、

〔卷〕

〔十一〕

〔六行分空白〕

〔八行分空白〕

〔二九才〕

〔二九才〕

六 御役下

16 文政九年十月廿六日

一 御馬廻組頭山田文作義、近來格段

御取立被 仰付、処、常々不勤、病氣与

年申、昨今年数月引籠、御奉公

筋忘却緩怠之至り、不届ニ付、

寄合江役下被 仰付、

17 同十二年五月廿日

〔米〕

〔十三〕

一 御持筒足輕早川富之丞・田口庄蔵

義、西御門當番之節、在医倉谷俊隆

伴立意義、心得違ニ而西御門を武者

屯迄罷通ゆニ付、詮議之処、富之丞儀、

持病差發、庄蔵義介抱い多し、其後

手水へ参ゆ旨、申出ゆへ共、御場所柄通し

聞取もの見逃し相通、義、御締不

相立、勤方緩怠之至、ニ付、勤料之内

俵子拾俵ツ、被召上、長柄之ものへ役下

〔富之丞、国日記に藤之丞と修正〕

〔二〇才〕

〔二〇才〕

料

申付、

18 文政十二年九月四日

資

一 諸手足輕青木藤次郎・石岡永吉儀、

八日振御飛脚下之処、取、出水ニ而

留与ハ乍申、御定茂有之処、格別延着

付、勤料拾俵ツ、被差引、長柄之者江

〔一四〕 役下申付、

〔二二六〕

19 文政十二年六月十三日

一 御持筒足輕山田喜太八儀、常盤山江

御出之節、御供先無調法之義有之、

勤料之内俵子五俵被召上、御旗

固へ役下申付之、

20 同年十月廿三日

一 以上支配花田平四郎儀、去八月

黒石表祭禮之節見物ニ罷越、酒狂

之上、同所足輕与争論ニ及儀ニ付、

〔二二七〕

再應証議之處、大小ヒ奪取、其上
打擲被致、義、相違無之旨、御奉公
筋令忘却、武士道ニ相反し、未練

之致方ニ付、御給分被召上、永之御暇

被下置、尤旧家被思召、格段之以

御憐愍、平四郎弟勝次郎江新ニ

〔一五〕 俵子貳拾俵武人扶持被下置、長柄之者

召抱ヒ 仰付、

〔二二八〕

但、右之儀ニ付、黒石之ものを迄御片付
方之後、い御有之、

21 天保元年九月廿四日

一 御持筒足輕打越勇吉儀、大坂表

打越市五郎与由緒談合之儀ニ付、

段々證議之処、不束之儀申募、前後

〔一六〕 被乱之申出、取扱重相成、不埒ニ付、

勤料之内俵子拾俵被召上、長柄之ものへ

役下申付、尤已来打越家名不相

用儀申付、

但、右ニ付、三奉行沙汰有之、

〔二二九〕

22 同二年八月十二日

一工藤彦兵衛儀、御代官勤中、三浦元市

御用義不正之取扱有之を始末存存、

組替ニ及ゆ節、早速頭役へ可申繼、処、

〔三六〕

〔三三六〕

無其儀、却而郡奉行江内意相違、

密ニ吟味之旨、必竟一己之勤功を貪、

表裏之勤方、不届ニ付、存命ニゆへ、

急度可被 仰付、へ共、格段之以

御憐愍、俸九郎一江御給分無相違被下置、

御目見以下御留守居支配被 仰付、へ、尤

是迄之勤料者と差引、

23 〔三八四〕
天保五年四月廿六日

一内南御門番御手廻与力佐藤儀作、

佐藏專吉、内東御門番金金吉、

小笠原孝司義、去ル十四日當番之節、

乱心之もの見落、

御城内江相通しゆ義、御太切御門番

相勤能有、不締ニ付、

〔三三ウ〕

24 天保五年十一月三日

一 宰奉行成田新助儀、當番之節、宰

扱之もの数人有之、詮議之処、罪人

取巧ニ預、身力を盡し差働取押

召捕ゆへ共、右之内濱館東馬・仙臺之

甚藏義へ行衛相知不申ゆニ付、詮議

始末申出之趣、不得止事筋与へ乍申、

勤方之守を失ひ、不届至極ニ付、身上

可被召上ゆ得共、大赦已前之儀、殊ニ

急變之場合身力を尽しゆ得共、

手段ニ餘り尚御奉公筋難相立義

を深ク相弁、既ニ他境迄も尋廻り、

義、 思召格段之以

御憐愍、御旗警固へ役下被 仰付、

尤勤料之内拾五俵と差引、

〔三七〕
御付、

御目見以下御留守居支配江役下被

〔三四オ〕

〔三四ウ〕

料

資

25 天保九年閏四月三日
〔卷十八〕

一平川金弥儀、去年々當春迄三匳

詰物奉行之處、御固所詰合中、言行

不宜、其上市中江度々罷越、乱ケ間

敷養不有之、御場所柄をも不弁、不

届至極ニ付、

御目見以下御留守居支配江役下被

仰付、

〔二五才〕

26

同日

一御馬廻與力千葉仁左衛門義、右同大筒方

之處、常々不言行ニ而、過酒之上、市中江

罷越、不法之致方不有之、不届至極ニ付、

御給分之内拾五俵被召上、長柄之ものへ

役下被 仰付、

〔二五ウ〕

27

天保九年四月十六日

一田中藤太親勝衛義、無調法儀有之、

於川原平村牢與被 仰付、ニ付、侍

〔卷十九〕

藤太儀、未若年之事ニ由間、格段之以

御儀懸、知行之内半知被召上、

御目見以下御留守居支配被 仰付、

〔五行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔裏八行分空白〕

〔二六才〕

七

追放 送返 町拂共

28 文政十年十二月廿六日

一三奉行申出、他領もの疑敷筋有之、

野内御關所口送返之節ハ、淺虫村

領鑑懸御境ニ而追放之由ニ付、直様

立歸又々送返ニ相成、ものも有之趣

相聞得、甚不締ニ付、以來村繼ニ而

野内御關口送返ニ相成ものハ、

〔卷二十〕

淺虫村平内領土屋村迄相送り、

夫の段、村繼を以、狩場沢迄送届

〔二八才〕

い處ニ而、同所番人共吟味之上、以來御當領江入込不申ゆ様、急度申渡、御境外迄追放しゆ様、其外右ニ付三奉行与り委細沙汰有之、

〔二行分空白〕

〔二八才〕

〔表八行分空白〕

〔二九才〕

〔三三〕

〔裏八行分空白〕

〔二九才〕

八 御暇

29 文政十一年二月十三日

掃除小人堅田村淺次郎義、皮師

清藏三男嘉助ニ有之處、御持鏡

仲間仁兵衛方江養子ニ參、仁三郎跡ニ而

掃除小人ニ相成、義ニ付、吟味之処、元來

皮師之義者正民与縁談向不相成

〔三〕 處々、内々ニ而堅田村甚兵衛方江養子ニ

〔三三〕

〔三〇才〕

相成、其上甚兵衛妻子淺次郎

名目ニ而、御給人江養子相成ゆ儀者、

悉皆甚兵衛并親清藏所為とハ

乍申、右躰之もの御給人ニ有之、而ハ、御締合不宣ゆ間、御給分被召上、永之御暇被下置、皮師清藏へ御返被仰付、

但右ニ付、以來御締方ハ之儀者い知有之、

〔三〇才〕

30 天保元年二月廿三日

一 御留守居支配御徒代目付佐藤門弥儀、

熊野宮於近辺、土手町兵吉与申ものハ

手疵為負ゆ旨相聞得、詮議之處、

右躰之義無之、見聞ニ罷越ゆ旨、申出、

得共、申訳難相立儀者、明六時前當番ニ

出勤之途中ニ而、田町ニ手負人有之

〔三〕 迎、當番越差置、同所へ罷越、出刻限

〔三三〕

〔三〇才〕

を欠ゆ義、并聞捨難相成見聞筋ヲ

心得、ハ、扱之始末早速可申出ゆ處、

無其儀、殊ニ同役江も知らせ不申、

昼ニ至り、同役添心ニ預申違ニ及ゆ共、

偽申出、悉皆勤向忘却い多し、

料

不屈至極ニ付、御給分被召上、永之御暇被下置、

資

31 同年五月廿九日

一 幸奉行安藤專吉儀病死ニ付、悴

酉藏、忌明書付之義申出由共、專吉

末期申立不埒ニ付、跡式被召上、

〔三二ウ〕

32 天保元年六月三日

一 小細工人山口左五郎儀、常々勤方不取

節、猶又此度御屏風仕立之節、私

曲之儀有之ニ付、御給分被召上、永之御暇

〔三二エ〕

被下置、

〔三二オ〕

33 同年十二月五日

一 御持廻仲間長吉儀、黒石表江遠使ニ

罷越、帰之節、御用先をも不弁、追子

野木村ニ而不法之致方有之、其上大小

被取押出段、輕身与乍申、甚以不覚

之至ニ由ニ付、御給分被召上、永之御暇被下置、

但、同日、御持廻仲間兵内義、同役長吉

難儀之場を相救不申、御田状運成、

處へ事寄せ、其場遣去、却而長吉始終

之儀不存旨、取替之中出、未練之不屈ニ付、

御給分被召上、永ノ御暇被下置、

〔三二ウ〕

34 天保二年九月三日

一 横山籠司儀、資藤傳次郎ニ米并撫

被盜取由よし申出、吟味之処、前後相違

〔三二エ〕

及び悉皆無実之難題を由懸由段、

人道不輕義を等閑ニ相心得、殊親

与五左衛門不筋之義有之由ハ、諫言を

茂可致處、無其儀、孝養之道を失ひ、

一己之利欲を専とし、行状不嗜之

段、不屈至極ニ付、身上被召上、永之

御暇被下置之、尤与五左衛門義も元來

強欲之ものニ有之、別而此度之一件

無実之義を取巧、詮議之処、色々相違

申出、不屈至極之ものニ付、御刑法ニも

〔三二オ〕

〔三二ウ〕

35 天保二年十二月六日

可被行得共、近年老邁い多し
氣分不宜、於一間所養生伺之通
被 仰付、ものニ付、格段之以
御憐愍、不埒御用捨被 仰付、

〔廿八〕

諸手足魁原田
覚太郎弟
原田市五郎

〔三四ウ〕

共方兄覚太郎儀、御持鋤仲間淺吉
妹勾引同様之仕振有之趣、相聞得、
詮議之処、委細申出茂有之ゆへ共、淺吉
申出ニ者無相違、勾引之趣ニゆ、然者輕
身分与作申、右躰不埒之致方、不屈
至極ニ付、急度可被 仰付、へ共、當八月
氣分荒、敷、於一間所養生伺之通
被 仰付、義ニ付、格段之以
御憐愍、御給分被召上、永之御暇被
下置之、

〔三四ウ〕

〔廿九〕

十二月六日
〔二行分空白〕
〔要八行分空白〕

出座
御徒目付
足輕目付

〔三五オ〕
〔三五ウ〕

九 一間所他出差留登高
文政十二年十月十六日

一武藤多宮儀、常々行状不宜、隨意
増長致、役儀不似合之事共有之、
其上養家并親族不和合之旨相聞、
不屈ニ付、隠居被 仰付、実家棟方
晴吉江御返之上、他出差留被 仰付、以
御憐愍、多宮養父駒五郎実子
〔三十〕

〔三六オ〕

崑三郎江、駒五郎跡式無相違高
百石被下置、御留守居組被 仰付、
〔六行分空白〕

〔三六ウ〕

一〇 儀絶 勘當 和談

一四三

料 文政九年十月十九日

一山中兵部申出、以下支配奈良岩次郎

親兵太儀、母存念不相叶、久離之旨、

斷申出、間、聞届、旨申出達、

資

38 同年十二月十五日

一松山玄三申出、三男玄壽義、報恩

〔卷〕 寺内弟子致置_レ處、不行跡ニ付

〔三七六〕

同寺ニ而勘當之旨、依之私方ニ而も勘當
之旨、承届、

39 文政十年九月廿八日

一本多東作申出、伯父本多忠左衛門

義、男子無之、娘方江竹内衛士弟

三郎儀智養子願之通_レ 仰付、處、

三郎妻常々不行跡ニ付、親類共打寄、

加異見_レ共、増長ニ付、此度離縁致せ、

〔三七七〕

私并親類共、久離仕、旨、承届、

但、三郎_ノ離縁之旨達有之、

40 文政十一年十月七日

一光保半司申出、親類川田權作兄

小助義、常々言行不宜、親類打寄

加異見_レ共、不相用、増長ニ付、私并

權作其外親類共一統、久離儀絶

〔卷〕 之旨承届、

〔三八九〕

41 文政十二年十一月二日

一神茂左衛門申出、親類増田浅五郎

伯母不行跡ニ付、親類共相寄、加異

見_レ共、一切不相改、追付増長ニ付、

茂左衛門并浅五郎其外親類とも

一統、久離儀絶之旨申出、承届、

42 天保元年二月十九日

一川田權作・光保半司申出、親類

中田慶吉弟園治義、不行跡ニ付、

先年勘當之処、此節病身ニ罷成、太刀

打付_レ行駄ニ而送参、ニ付、親類相

〔三八九〕

談之上、慶吉宿元ニ而養生相加羅有、
勸業養許之義者、慶吉江戸詰ニ付、申
遣、追而可申上旨、承届、

43 天保二年二月晦日

〔本〕 唐年三左衛門申出、以下支配奈良岩次郎
〔卅三〕

親兵太蔭、久樂養許度養、願之通
申付、遣、

〔三九七〕

44 文政十一年八月十二日

一 以上支配花田平四郎儀、黒石表神事

見物罷越、争論い多しハ義ニ付、親類

成田官職召連罷歸ハ処ニ而、見難方并

他出差留之義、委細有之、

45 天保元年二月六日

一 野呂才吉姉平井元三郎母、

常、氣随増長、家事不取締之旨、

相聞得、ニ付、里方才吉方江返置、機、

〔三九七〕

尤他出不致、機ヒ 仰付、
〔同四年十一月廿七日、
大慶ニ而宛テ仰付、

46 天保二年六月十二日

一 中村信吉・秋元友弥申出、作事受辨役

和田六郎兵衛弟峯弥養、友弥親之

〔本〕 此病屈ニ而於一問所養生致ハ共、
〔卅四〕

友弥養家内少、殊ニ老母病身ニ而

見難行届兼ハ問、六郎兵衛方江水ク

引取、養生致度養、双方願之通、

〔四〇七〕

47 天保二年五月廿日

一 岩川藤兵衛申出、去十月方飛鳥村

別段締役之処、津藤助養他出差留

之上、藤兵衛并親類共ニ而教諭ハ様、

被 仰付、ニ付、右加役 御免願申出、

親類頼合是迄之通相勤ハ機被

仰付、旨申遣之、

〔四〇七〕

48 天保八年十月二日

料

資

一阿部半次郎申出、間山文八郎義、御詮議之筋有之、他出差留之処、同人居宅庇通大破之場所懸直并其外、資垣ノ直ニ致セ度義旨、承届、

49 同九年七月十九日
一册五

一成田小兵衛申出、甥平沢小三郎儀病氣之処、氣分荒々敷相成、ニ付、一間所江入置、養生仕度、尤同人儀家屋敷所持不仕、秋元藤弥方江借宅、殊ニ家内女共并幼少者斗ニ付、小三郎本家平沢左一方江一間所取建申度義、願之通、

〔四一才〕

50 同廿一日

一須藤半兵衛用達黒石家中木村鉄太郎儀、御詮議之筋有之ニ付、他出差留被 仰付、
但黒石表ニ申通方、町奉行江口達ニ同申付、

〔四一ウ〕

〔卷〕
一册六

〔三行分空白〕
〔裏八行分空白〕

一四六

〔四二才〕
〔四二ウ〕

一一 咎人御下 公義 御呼出共

〔七行分空白〕

〔裏八行分空白〕

〔四三才〕
〔四三ウ〕

一二 入牢 出牢

51 文政八年八月五日

一大組足輕三浦要八兄次郎助儀、津輕案吉方ニ奉公致、もの之よし、然処詮議之筋有之、入牢申付、見合セ詮議之筋有之ニ付、同人家來牢前江差遣様申遣之、立合両目付之内
〔卷〕 差遣様申遣之、大目付へ申遣之、
一册八

〔四四才〕

52 天保九年四月十六日

一田中勝簡義、勤向言語同断不届

至極ニ付、於川原平村宰居被
仰付、

〔四行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔卅九〕

〔裏八行分空白〕

〔四四ウ〕

〔四五オ〕

〔四五ウ〕

一三 御仕置

53 文政十年十月廿九日

一木造村出生無宿銀藏寺中もの、

高館領法嶺院ニおめて、住僧并

寺中ニ居ゆもの共都合四人打殺、

外式人江深手為負、錢并衣類ハ

盜取、右跡取隠し可申寺同寺江

〔志〕 火越仕懸、言語同斷極惡重罪

〔四十〕

之ものニ付、土手町橋側ニおめて

三日肆之上、町中引廻、際ニヒ行、

義、い細三奉行沙汰之通、

〔五行分空白〕

〔四六オ〕

〔四六ウ〕

一四 遠慮諸事

54 文政十二年六月十二日

一山形字兵衛儀、遠慮伺之通被 仰付、問、

忝權平青森湊目付之処、罷上り

遠慮伺差出度、當分代伺申出、代

御沙汰中、宇兵衛儀遠慮

御免被 仰付、問、以御用捨、權平儀

〔志〕 遠慮伺ニ不及、當分代伺書付致

〔四十一〕

返却之旨、頭方へ申遣之、

〔四七オ〕

55 天保元年七月十七日

一此度儀被 仰付、面々江罷懸、而、

御尋被 仰付、義ニ付、恐入、御奉公遠

慮伺差出、ニ付、被 仰付之有無、評議

可仕旨被 仰付、ニ付、段々御先格相糺ゆ

得共、為差類例も無、座、依之互得

相考、處、先上下共ニ信実を以

可相交与、兼而被 仰出御座、然ニ親友并

恩顧有之家杯安盛之内ハ、親も深ク

〔四七ウ〕

禮

致仕へ共、較敷御阿不申 仰付、ハハ、兎角
是迄親き中ニモ、何となく疎遠ニ成

勝ニ而、是全く信実之交ニ無之様也、

數令親族ニ無之共、誦弟之間并出

來之恩顧互ニ不致忘却面々ハハ、積き

〔四十二〕 閉門など、遠、懐申江相尋、義、

御咎世 仰付、ハハ、人情弥信実を取

失ハ様成行可申哉ニ奉存、唯是

迄之仕來を以何速成相尋、事ニ

相聞得、間、何となく御圍流シニ被

仰付、様ニ奉存、是迄御例無之義者、

親族之外、相見舞、哀急度不相

成、様ヒ 仰付ハハ、交之信義薄ク可相

成哉、又往來不苦様被 仰付、ハハ、

不憚 上御威光輕ク相成可申哉、

右之取合ニ而、是迄何共被 仰付無御座哉

奉存、乍共御側向相勤、面々者、

兼而被 仰出哉有之ハハ、御医者多リ共、

斟酌も可有之、若引請、病人ハ御座、ハハ、

竊之御上沙汰次第可仕裏、矣嶋

空顧者心毎堪奉存ハ間、遠慮伺之通

可被 仰付哉、奈良岡遠慮義ハ、見舞

身乍申、日々往來、不憚 上を致方

ニ付、遠慮伺之通可被 仰付哉、其外之

面々者伺書御返可被 仰付哉之義、御

用人沙汰之通、

〔四八三〕

56 天保元年六月十七日

一 豊崎九十郎儀、見笠原八郎兵衛并

鶴近江儀ニ付、御奉公遠慮伺申出、

御沙汰中、諸動是迄之通被 仰付、

尤几而

御前体者相憚ハ様被 仰付之、

〔四八九〕

57 同二年七月廿六日

一 石郷岡有藏申出、以下支配三浦

元吉致、懐中之処、姉病死ニ付、今晚

夜ニ入密ニ遊送、伺之通、

〔四九三〕

〔四九ウ〕

58 〔八三三〕
天保四年十月廿一日

〔一〕一横山親左衛門申出、毛内有右衛門儀
〔四十四〕

無調法之儀御座而、御役被召放、慎被

仰付處、同人隣家木村奎之助

御役柄、裏合津輕式部殿御重役之儀ニ付、

通用口之義、如何可被 仰付哉之

義、式部殿重役ニ而茂不旨旨、同所江

内、申合、目立不申儀通用致儀様、

ト 仰付旨申遣之、

〔五〇才〕

59 〔八三五〕
天保六年閏七月四日

一 間宮善太申出、多田三左衛門義

於江戸表ニ御沙汰中慎被 仰付、聞、

家内相俟せ、門戸閉可申哉之義、申出、

家内之義者相俟居儀様、門戸者閉ニ

不及旨ト 仰付、

但、天保八年四月十八日古川忠左衛門

同断ト 仰付、事、

〔五〇才〕

60 〔八三六〕
同七年十一月四日

〔三〕一兼平帯刀申出、笠原近江儀
〔四十五〕

候中之處、雪降敷、屋敷前取片

付之義如何心得可申哉、町柄之義

門戸を不閉罷在、ニ付、奉伺、旨申

出、門前雪取片付之義、屋敷方ニ而

取片付、様申遣之、

〔五一才〕

61 天保九年四月十九日

一 杉沢彦太郎申出、叔父藤岡永作

候中之處、母今朝病死ニ付、今晚

密ニ運送致度義、目立不申運送

致、様ト 仰付、

〔五一才〕

62 同年六月九日

一 平井元三郎姉山田登妻不縁ニ付、

離縁、尤元三郎義候中ニ付、諸道具

取賦之義申出、夜ニ入目立不申

取賦儀様申遣之、

料

63 同年八月廿七日

〔五二才〕

資

一木村十三郎申出、兄野添織三郎

義、慎之処、替友三郎義御用相勤、

様被 仰付、御用之度々、通口無之ニ付、

西隣金原藏次郎通り借用致居、

處、共、大病人有之、先度々断有之、東

隣之義者小嶋善兵衛方ニ而奥勤之

事故、相頼、義も難相成、間、友三郎

義御用之節、出入如何可仕哉之義、

目立不申出入致様被 仰付之、

〔卷〕
〔四十七〕

〔七行分空白〕

〔裏八行分空白〕

〔五二ウ〕

〔五三才〕

〔五三ウ〕

卷之二十一

凶事

被 仰出附詮議〔一〕 許居〔十一〕 盜賊召捕〔十五〕

閉門
道塞

御役下〔廿一〕 遠慮諸事〔卅七〕

一五〇

御預〔四十九〕

追放 附返町拂〔五十六〕

儀進

勘當〔七十六〕 御暇〔六十五〕

一箇所 他出差留〔七十九〕

聲高 〔五四才〕

善人御願下之義御申出
〔九十二〕

入寮 〔百五〕 盜賊 〔九十〕
出寮 召捕

御仕置〔百二〕

〔五四ウ〕

一

被 仰出 附詮議

64

〔八三九〕
天保十年八月五日

一此度御旧格之通被 仰出ニ付、日數

相立の遠慮伺江前後之日數入加

の之儀、御止之儀、御用人中江申付、

於其表可被 仰付旨申來之、

65 同年十一月十七日

〔卷〕一諸手足輕大井源八郎申出、母方之
〔一〕〔口取紙〕天保十年ヨリ

〔五五才〕

66 天保十年七月二日

叔父横山龍司儀、一間所入之上御預之処、昨日當番跡ニ而逃去、所ニ詮議仕、得と母行衛相知不申、以御威光御詮議と 仰付度旨申出、三御關所江町同心老人諸組足輕次人充差向、見當り次第召捕、様申付け、

〔五五ウ〕

一三奉行申出ゆ、御家中并御給人評定所ニおゐて私共詮議之節、袴役已上、御次第ニ不拘、一統御座敷内ニ而詮議仕来、ニ付、此度評議之表、左ニ、
一御目見以上之儀者、是迄之通御座敷内江座付、様、尤
御目見以下御留守居支配之儀者、以下与乍申、外役与違も有之儀ニ付、矢張御座敷内江座付ゆ様、尤以上

〔五六オ〕

67 天保十四年五月十六日

与者御座上下ニ而差等いふし、様、一右已下帯刀役迄、一統白砂前敷臺江座付、様、
一一本指之儀者、是迄之通、白砂前、相居、様、
右之通評議仕ゆ間、御聞届被仰付度義、申出之通、

〔五六ウ〕

68 弘化二年四月廿二日

一家屋敷御取上被 仰付、節、立合目付之儀、是迄區々ニ付、以来者家財欠所之外、一通之御取上之節者、両目付立合無之事、尤 御目見以上者格別之事、
〔八四ウ〕 一三奉行申出ゆ、御手廻館美三郎
〔三〕 義以下支配工藤源之助ハ、喧嘩致ゆ之旨ニ而、御詮議之答書御渡之上、

〔五七ウ〕

料

資

不落合義戎有之儀、私共ニ而詮議之上可申上旨ト仰付、然ニ右一件

書拔ホニ而詮議致、而茂、双方共取初

申出同様ニ而落合申間敷ニ付、私共ニ而

口開詮議可仕与奉存儀、然処御手廻

以上之御例相分不申、問、評議仕、処、

御目見已上之面、私共詮議之節、

脇差帶せ不申、両手を盤江為突、

其方与呼儀者、古格ニ御座儀、

月並以上 御目見以上共、何と

なく其元与呼来、得と母、不穩、問、

以来者其方と申懸可申旨、御開屈

ト 仰付、様、元來詮議事之儀者、

御威光無御座、而者相成不申ニ付、

御手廻已上ニ而茂、前書同様、脇差

刀帶不申、其方与呼、様ト仰付、様、

但、詮議之席へ罷出、節、詰合

兩目付之内ニ而、兩腰押、様、其方

与呼、儀者、出席御目付ニ而、當人

江申渡、様、
右之通被 仰付、様、左、ハ、御目付へ

〔五七ウ〕

〔五八才〕

一五二

ト 仰付方外、兩目付江被 仰付方

方、大目付ト仰付、様、沙汰申出、以來

御留守居組已上、脇差為帶、其元与

呼取、様、右已下者脱刀、其方与呼、様、

ト 仰付旨申遣、

〔五八ウ〕

69 弘化二年五月七日

一三奉行申出儀、前書之通、御点羽

を以ト 仰付儀ニ付、与得評議仕、処、其許

〔米〕 与呼儀者差障も無之儀、脇差為

〔五九才〕

帯儀者差障之筋有之儀、子細者

御詮議事之儀者御威光無御座而者

難相成、且公事訴訟ニ罷出、族

不所存ニ而如何様之凶事出来、故も

難斗、尚又其族ニ寄、番人附ホ

ト仰付之節者、兼而大小取押置、私共

詮議之節者、途中筥ニ乗せ、大小者

沙紙包ニ、多し持せ、儀ニ御座、然ニ

詮議席江罷出、節、脇差相渡

〔五九ウ〕

為帶、^{〔出〕}不穩、間、已來者御留守居
組以上者、脇差為帶不申、其許与
呼、様^ヒ 仰付、様、沙汰之通、大目付
并御目付江為知申遣之、

70 弘化二年七月廿四日

一三奉行申出^レ、館美三郎於評定

所三奉行對談詮議有之相詰、^{〔出〕}処、

〔六〇〕

両目付与^リ、脱刀之上、手越突、様、
申通^レ得と母、頭方与^リ被 仰付無之、
御作法ニも相拘^レ間、罷出兼^レ旨、
強而罷出可申旨ニ得者、脇差い^ハし
控擽之上、婦宅致、旨、委細別紙之通
申出、詮議之席江不罷出、段、不埒ニ付、
左之通^ヒ 仰付、様、

〔六〇才〕

一館美三郎申出^レ、去月廿四日三奉行

對談詮議被 仰付、詮議之席江罷出、節、

繰出御徒目付ニ而、脱刀^ハ之賤申通^レ

得と母、頭方与^リヒ 仰付無之ニ付、附添

〔六〇ウ〕

〔七〕

親類を以、御目付江懸合、^{〔出〕}処、同様之
申分ニ有之、御作法ニ茂相拘^レ間、
不罷出、且腹痛致、ニ付婦宅之旨共、
委細申出、然者一通之對談与違^ヒ、
御詮議之筋有之、三奉行對談

〔六一才〕

詮議被 仰付、儀ニ付、脱刀^ハ之儀、

御沙汰之上被 仰付、猶又右躰之儀

ニ而相詰^レ節者、御目付者勿論、繰

出御徒目付杯差圖ニ隨^ヒ可申^レ処、

頭方申付無之、且御作法ニ相拘^レ杯

差合、腹痛申立、婦宅致^レ段、

不埒之至ニ付、追、御沙汰被仰付旨、

被 仰付、様、尤腹痛全快之旨ニ付、

對談詮議之儀者可被 仰付^レ間、

其旨兼心得、様、

右之通被 仰付、様、沙汰之通、

〔六一ウ〕

71

弘化三年十一月十九日

一大目付申出^レ、昨日被 仰付、藤田

一五三

料

弥七家扶之処、四ヶ所御紛失品不残
出、旨、昨夜両目付と母与り申出

旨、委細御用書を以申出、得と母、相分
〔六二〇〕

資

兼儀も御座の間、詮議中ニ付、一通
御達申上旨達、

〔六二〇〕

72 弘化三年十一月朔日

一去月廿六日之夜、紙御覽役所ニ而
諸帳面被盜取、旨申出、然者夜中

往來不相成御場所ニ付、夜明ケ御門出
いし儀ニ可有之ニ付、其節之御門

〔六二〇〕

番、疑敷もの見當り不申哉、外四ヶ所
御門番詮議之上、書付を以申出、様、

書取ニ而御目付江相渡、
但、同十月廿七日御覽ニ而被盜取品、
委細申出有之、

73 弘化四年九月十一日

一花田豊太郎親又八郎儀、詮議之筋
有之、昨日召捕方と仰付、処、居合

一五四

不申旨、申出、ニ付、人相書差出、様、
〔六三〇〕

御留守居組頭江被 仰付、

〔六三〇〕

74 弘化四年十二月十五日

一三奉行申出、御渡書付之内、
御目見以上ニ而も支配頭江書拔相廻、詮議

方申進來、然ニ御買物役格小山内治助
義ニ付、頭名御目付へ書拔相廻、被

仰付無之旨、返却ニ相成申、然者其時、
御詮議方之義申上、而者、御手数相成、

〔六三〇〕

且御片付方も閑放取不申、間、私共与り
書拔相廻、ハ、致詮議様、御目付へ被

仰付、様、申出之通、

〔五行分空白〕

〔六四〇〕

〔要八行分空白〕

〔六四〇〕

二 御 居

75 天保十年八月六日

一津輕彦作親出雲儀、養居

御免被 仰付、尤先達而病死ニ付、
仏事ハ勝手次第致、様被 仰付也、

76 同十四年十二月廿七日

一須藤半司親半兵衛義、御阿後年數

〔本〕も無之由得と母、門弟取立方も有之
〔十二〕

ニ付、格段御沙汰を以、養居

御免被 仰付、稽古所江罷出

教授い、しゆ様被仰付、尤他出

差留之上、稽古所江罷出、面々并

親類之外、對面不致、様被 仰付也、

〔六五才〕

幕ニ入、自立不申、致葬送也様被
仰付也、

但、同四日相勝不申ニ付、町医吉原
道岡呼入薬用、同之通、

78 弘化二年十二月廿三日

〔本〕

一對馬常三郎申出也、成田甚吾儀、

今重太郎江御預之上、於一間所

養居と 仰付、処、重太郎病死後、

私江見繼と 仰付、然処先頃積氣

強、養生不相叶、今晝病死ニ付、

葬送之儀如何可と 仰付哉之儀申出、

夜ニ入、自立不申、葬送致、様被

仰付也、

〔六六才〕

77

〔本〕
天保十五年八月七日

一工藤得太郎申出也、親身助義無調

法之儀御座、而、養居と仰付、罷有

也之処、先頃積氣差發、養生

不相叶、昨夜病死仕ゆ、依之葬送

之儀如何可被 仰付哉之儀、伺申出、

〔六五才〕

79 弘化三年八月廿七日

一田中藤太申出也、私儀家屋敷所持

無之ニ付、於銅屋町万助名題御旗

警固成田享作方ニ同居、願之通被

料

仰付、然廻親勝齋詣居被

仰付罷在、間、引移之節如何可被

仰付哉之儀申出、夜ニ入、行駄駕籠

資

ニ而引移、際ヒ 仰付也、

〔七〕

〔六七才〕

80

〔八四〇〕
天保十一年四月十七日

一須藤半司右衛門・工藤得三郎申出也、此度

家屋敷拝領ニ付、引移之節、親共

詣居ヒ 仰付居、ニ付、如何被 仰付哉

之儀、夜ニ入、山駕籠ニ而引移、様

被 仰付也、

〔二行分空白〕

〔八〕

〔表八行分空白〕

〔十四〕

〔裏八行分空白〕

〔六八才〕

三

盜賊召捕

81 天保十年三月四日

一松前箱館町百姓梅松召捕之儀

申來、得と母、御當領ニ不居合儀

83

弘化三年八月朔日

一勘定奉行申出也、當江戸御廻船

泉易岸和田勝次郎船、沖合難風

ニ而荷打いし、南部佐井浦江

入津ニ付、為見分、御勝手方勘定小頭

伊藤吉太郎并御徒目付罷越、処、

船中手段之儀有之ニ付、船頭水主

〔六九才〕

82

同十五年十二月十八日

〔九〕

一三奉行申出也、已下支配小山多吉

〔十五〕

出奔之伯父忠吉事當次郎義、

江戸表ニおゐて中村良吉召捕

之節、差働也ニ付、御国入

御免之上、取上村ニ而屋敷地と下

置、儀ニ付、委細三奉行沙汰

之通被下置也、

〔六九才〕

と召捕、様守と仰付散之儀、吉五郎
与り申奉、間、私共評議之上、申上、処、

【七〇】
【十六】 今一應評議と 仰付、間、御奉行并

町奉行私共打寄、種々評議仕、得と申、
御廻米之儀者、諸家様一同之儀ニ而、船
法茂有之儀ニ得者、假令場所柄与
乍申、平和便之御扱ニ而着御締も
相立不申、他那江之圍得ニも相拘、間、
吉五郎与り申出之通、捕手之もの
差向方と 仰付、様、尤船中拾七人乗
御座、得者、不幾召捕ニも及申間敷、
船頭老人、水主之内知工老人召捕
之儀、時宜取計方可申付奉存、右
召捕方之儀、左之通、

- 宗藤仁太郎
- 足輕目付一人
- 町同心五人
- 大組足輕式人
- 諸手足輕式人

【七〇】
【十七】

【七〇】

【七〇】

【七〇】

掃除小人式人

飛脚三而參、而
案内ニ留置候
もの忠人

右之通罷越、様、尤佐井江着之節者、
目立不申候様、吉五郎与り申來、間、
私共ニ而仰付可遣奉存候、申出之通、
其外諸儀へ仕向方、委細有之、

【七一】

弘化四年二月朔日

一三奉行申出候、松前家中掾沢

由右衛門家來豊藏与申もの、由右衛門
を殺害い多し退去候ニ付、捕手之
者差遣、間、其筋へ申付、見當次第
召捕ニ相成、ハ、捕手之者江相渡
可申旨、猶右豊藏与申もの、松前江
上陸之節、身元取組所、弘前土手
【十八】
町菊三郎与申者之旨申立、由右衛門
家來ニ相履、豊藏与致改名候

【七一】

趣ニ付、弥御當儀人別之者ニ可有之哉之旨、委細來狀并返翰其外沙汰人相書ホ、委細之旨、

85 弘化三年十二月十九日

一大目付申出儀、昨日ト仰付、藤田弥七家扶之処、四ヶ所御紛失品不残出、旨、

〔七二ウ〕

昨夜両目付共ケリ申出、委細御用出を以、申出、得共、相分兼、儀茂御座、間、詮議中ニ付、一通御達申上ゆ之旨達、

86 同年十一月朔日

一 去月廿六日之夜、紙御藏役所ニ而

諸帳面ト盗取、旨申出、然者夜中

〔七三オ〕 往來不相成御場所ニ付、夜明ケ御門

出以多し、儀ニ可有之ニ付、其節之御門

番疑敷もの見當り不申哉、四ヶ所

御門番詮議之上、書付を以申出、様、

書取ニ而御目付へ相渡儀、但、同十月廿七日御藏ニ而ト盗取品々、委細申出有之、

〔二行分空白〕

〔七三ウ〕

四 閉關 通塞

〔七行分空白〕

〔七四オ〕

〔七〕

〔裏八行分空白〕

〔七四ウ〕

五 御役下

87 天保十年三月十九日

一 町同心高屋半四郎儀、常、過酒

いし、殊ニ度々町家江罷越、役威

を以酒肴ホ差出せ、其上去ル十四日

和徳町之内神楽ニ付、町役重立

長利掃部方ニ居合儀過酒いし、

〔七四〕 婦り懸、於所ニ色々乱妨ホ致、諸人

〔七五オ〕

取騒せぬ段、重々不届至極ニ付、

急度可ト仰付、得共、格段御沙汰を以、

88

天保十年四月七日

並合之御給分被下置、掃除小人
江役下ヒ 仰付也、

一御徒目付三上常藏・一戸俊作義、

昨年 御参府御供登之処、

御本随前乘打不致也者有之

〔七五ウ〕

いハ、相答可申処、無其儀却而、

為自分乘打罷通也旨相聞得、

御締合ニ相拘、役柄不似合、不屈

ニ付、急度可被 仰付也得共、格段之以

御憐愍、常殿義者持料之内

拾五俵并勤折被 召上、俊作儀

持新之内老人扶持并勤料と召上、

〔七五〕 以下支配江役下之上、慎被 仰付也、

〔七六ウ〕

但、同日外ニ内藤吉作・阿保吉八、
足輕目付工藤良助・阿保吉右衛門
義茂役下被 仰付也、

89

天保十四年二月廿九日

一御中小性格青森町年寄村井

新助義、不筋之扱向有之旨相聞

得、詮議之処、委細申出有之、然者

年、重立中家之もの共取世話

ニ預、凶歳中相凌辱、其上昨年

屋祿替替之節、榎木舞ホ手傳

申受也儀、不埒之ものニ付、急度

可被 仰付也得共、格段之以御沙汰、

是迄之格御取放之上、慎被

仰付也、

〔七六ウ〕

90

天保十五年八月廿六日

〔七六〕 一御城附足輕山本勘藏義、當三月

〔七三〕

十日之夜出火之節、火元見舞ニ而

罷越、処、於途中、得手疵也趣、

委細申出、得共、其節之始末不宜、

必竟御用先不勘弁之処与り、不覚

悟之儀有之、不屈ニ付、急度可被

〔七七ウ〕

料

仰付、得共、格段御沙汰を以、並合之
御給分ヒ下置、御持誼仲間役下

被 仰付、

〔七七ウ〕

資

但、同日、諸手足輕須藤春司儀、當三月
祭、火消番ニ而罷越、於途中不法
ニ手向、もの有之、切付、旨申出、
待と母、眞怒之致方ニ付、候被、仰付、

91 天保十五年十一月二日

一 諸手足輕須藤春司儀、當三月

十日之夜、出火之節、火消當番ニ而

〔八〕 罷越、処、於途中不法ニ道支之上
〔廿四〕

〔七八才〕

切懸ゆもの有之儀ニ付、委細申出
も有之は得共、其節不取計之儀
有之、不届ニ付、勤新之内使子五供
ヒ差引、御旗警固江役下被
仰付、旨、申來、

92 天保十五年九月四日

一 御留守居支配候田定吉儀、永、

一六〇

病氣之処、押ミ出動いし、當四月

四日他行之処、狂氣ニも有之哉、

日沼村五右衛門与申者江手疵負せ、旨、

親類共与り委細申出、然者氣分

不宜儀与者作申、不届之致方ニ付、

隠居被 仰付、尤男子無之、親類

斎藤彦藏三男運次郎養子

願申出、願之通、御給分使子

〔九〕 式拾儀式人扶持、右運次郎江被下
〔廿五〕

〔七九才〕

置、御城附足輕被 仰付、

93 弘化二年三月十六日

一 斎藤甚五兵衛義、二男源八郎儀、

奥茲無宿己之松事与助与り

引替老步銀、通用難相成義

乍存、造捨、件ニ付、公邊御扱

相成、遠嶋被 仰付、然者源八郎儀

去ル亥年贖金一件ニ付、其方江

〔七九ウ〕

94

弘化二年六月十七日

一 諸手足輕今周敷義、當春

御飛脚下之節、道中於刈和野

金子紛失之旨、手段取功、宿や

懸合之所江、久保田役人參、金子

老歩立替遣ひ処、出立之旨、相

聞得ゆニ付、右金子之儀者御行列

〔八〇ウ〕

〔表〕
〔廿六〕

重御取扱ニ相成、不届之至ニ付、

急度可被 仰付、得と母、格段之

御沙汰を以、御留守居組江御役下

被 仰付ゆ、

〔八〇オ〕

95

弘化二年七月廿三日

一 佐藤常八郎義、當二月廿九日之

夜、宮下半藏江手疵を負せゆ旨、

相聞得、詮議之処、右跡之儀無之旨、

委細申出之趣も有之ゆ得共、常々

言行不宣、殊度々過酒、不埒之儀

有之ニ付、先達而御阿をもと仰付、処、

今以過酒いゝし不言行相券ゆ段、

無相違相聞得、不届ニ付、急度

可と仰付、得共、格段之以御沙汰、隠居

之上、他出差留被 仰付、家督高

百五拾石、悴江と下置、御留守居組

〔八一ウ〕

〔表〕
〔廿七〕

役下被 仰付ゆ、

方与り返弁致せゆ、然者懸き身分

与乍申、於他所右跡之致方、御給

人不似合、不届ニ付、急度可被

仰付ゆ得と母、格段之御沙汰を以、御給

分之内俵子五俵被召上、御旗警固江

〔八一オ〕

料

被 仰付、尤男子無之ゆへ、身寄
之もの養子申立、様被 仰付ゆ、

資 96 同三年三月十三日

〔係〕大組足輕柿崎朝次郎儀、去八月
〔廿八〕

百沢より歸之節、新町之三吉号

申もの不法いしゆニ付、切懸ゆ處、中

野俊吉并唐生富弥儀、朝次郎

を取押雜人共ニ打擲致せゆ儀ニ付、

吟味之処、委細申出、然者三吉儀

不一通不法いしゆ儀ニ付、不得止事

切付、儀、帶刀之身分尤之筋ゆ

得と母、數ヶ所淺手を負せ、打留

不申段、不束之致方、不屈ニ付、勤新

之内儀子五俵と差引、御旗警

固江役下申付ゆ、

同日 但、中野俊吉并唐生富弥儀、

他出差留之上、親江御預、新町之
三吉儀者、鞭十八鞭と行、居町捕被仰付ゆ、

〔八二才〕

97 弘化三年五月十五日

〔係〕鎌田勇次郎儀、去十一月於江戸表
〔廿九〕

不束之儀有之、相果、段、相聞得ゆ

よ付、急度御糺明可被 仰付、処、年來

相勤、儀ニ付、格段之御沙汰を以、

跡式儀子三拾俵式人扶持、忰勇太郎

江と下置、買物役格江役下と仰付ゆ、

〔八三才〕

98 同日

一御中小注御鷹匠加勢古川傳藏儀、

鎌田勇次郎相果、節、心得方茂

可有之処、無其儀、不實之致方、不屈

よ付、急度可被 仰付ゆ得共、格段

以御沙汰、親江御返之上、慎被 仰付ゆ、

但、四十日ニ而御免、

〔八三才〕

99 弘化三年十一月廿三日

一御徒目付内藤清作儀、忰色吉儀、

御藏元与り米附賦せゆ儀無之処、

100 弘化四年二月三日

〔三十〕丁持と母謙題申懸、不屈ニ付、親付

〔八四七〕

之上、和徳町名主江預置、問、御締方

ニ仰付度旨、申出、ニ付、其筋吟味之処、

伴亀吉儀語取儀、無相違相聞

得、御沙汰中ニ有之処、世上風聞度

不宜、問、親類打寄、亀吉詮義之処、

心得違ひ多し、米語取、儀、相違

無之旨、白狀ニ及、段、追々申出、然者

丁持と母米返方申出、節、精々遂

〔八四七〕

詮義可申処、無其儀、亀吉言張

を實正ニ聞受、無罪之丁持共、繩

付之上、町役江預置、御扱向申出、段、

役筋も乍相勤、龜忽之致方、

不埒ニ付、買物役格江役下被

仰付儀、

〔卅一〕〔二行空白〕

〔八五七〕

一以下支配長内旗藏義、去三月

十一日之夜、亀甲町ニ而館美三郎江

工藤源之助等處外致、一件、吟味

之処、委細申出、然者亀甲町ニ而不埒

之筋無之様、相聞得儀得共、長坂町

小路ニ而三郎被召捕儀、其場退

儀之義者、館美文内方江知せ可申為ニ

〔八五七〕

有之旨、申出儀得共、取締ニ無相違

相聞得、然者同道之三郎、右麻痺儀

之場ニ至儀を見捨、逐去儀段、

帯刀之身分不似合之致方、不屈ニ付、

御旗警固江役下被 仰付儀、

101 同日

一御留守居組今井清之助義、館美

〔卅二〕三郎・工藤源之助、争論ニ及、一件、

〔八六〇〕

吟味之処、源之助頼合之節、狼藉者

与差心得、町同心借用致違儀、

無余儀相聞得儀得共、召捕儀節、

料

資

三郎義御役名相名乘狼藉ものニ

無之旨申聞ゆハ、取斗方も可有之処、
却而差圖い多し召捕、其處町同心

共江相渡遣ゆ段、甚以不埒之致方、

不届ニ付、以上支配江役下被 仰付ゆ、

〔八六ウ〕

103 弘化四年六月三日

一御馬廻與力松下岩次郎儀、昨年

七月廿四日之夜、四之北御門當番之節、

御筋鉄炮老挺紛失之旨、委細申出

〔八七ウ〕

有之、然者御番所内ニ有之御筋道具

紛失い多し儀、必竟不締之勤方、

不届ニ付、以下支配江役下、勤新被

差引ゆ、

一以上支配与り加勢小野福次郎、同断

之事、

104 同年十月十日晦日

〔五〕御馬下乗石戸谷廣吉儀、常々不勤

〔八八オ〕

其上我意相募、家内不和合、殊ニ

一己之利欲ニ走り、不筋之取巧致し、

不届ニ付、急度可被 仰付ゆ得と母、

格段之以御沙汰、勤新被召上、隠居

被 仰付、實家相馬八三郎江御預之上、

他出差留被 仰付、尤数代下乗之

102 同日

一町同心境米藏・木村直藏義、館美

三郎召捕ゆ始末、吟味之処、其節

三郎義御役名姓名相名乘、儀

聞入不申旨、申出ゆ得共、取繕相聞得、

然者假令長井清之助ハ致差圖

ゆと母、始末取糺、取扱方も可有之処、

捕道具を以、理不盡ニ搦捕、其上

〔三〕

東長町上番所江引付、侍を十手ニ而

打、繩下タゞい多しゆ段、趣忽之至、

不届之者共ニ付、勤新之内俵子拾俵

宛被差引、長柄之ものへ役下被 仰付ゆ、

〔八七オ〕

家筋ニ付、跡式之儀者以

御憐愍、俵子式拾俵三人扶持、實

〔八八ウ〕

子源吉江被下置、御馬下乗格被

仰付、成長之処ニ而御馬下乗可被

仰付、間、外両家下乗共ニ並致見繼、

御用差支無之様、被 仰付也、

〔四行分空白〕

〔卅五〕

〔裏八行分空白〕

〔八九ウ〕

〔表八行分空白〕

〔卅六〕

〔裏八行分空白〕

〔九〇ウ〕

六 遠慮諸事

105 天保十年七月初日

一 伊東熊四郎申出也、兄杉沢金五郎儀、

無調法之儀御座也而、御役被召故、

御沙汰中、慎被 仰付、旨申來、恐入也

ニ付、同居宅門戸之儀如何可被

仰付哉之儀申出、家内之儀者相悞、様、

〔卅七〕 門戸之儀者閉ニ不及旨ト仰付也、

〔九一ウ〕

但、同十日桑山禮庵同断被 仰付也、

106 天保十年七月六日

一 野呂萬藏申出也、津輕頼母義、御國

下之処、明七日到着之旨、道中申來、処、

同人實父金藏義、慎中ニ付、着之節、

門戸開閉之儀如何可仕哉之儀申出、

目立不申、門出入致、様被 仰付旨、申遣之、

但、同十日成田祐作同断、

〔九一ウ〕

107 同年十一月九日 但、惣藏、御側役也、

一 笹権市申出也、一戸左吉儀、無調法

之儀御座也而、御手廻江御役下ト仰付、

ニ付、御奉公遠慮、伺之通ト仰付、処、

裏合士門八郎殿、隣家北原惣藏、御役

柄之儀ニ付、通用口之儀如何可ト 仰付哉

之儀、召使之もの目立不申、出入致、様、
申遣之、但同十二月、〔九二六〕
〔册八〕

〔九二六〕

108 天保十四年九月廿二日

一 松浦甚左衛門申出、多田三左衛門義、

當月中青森在番之処、御奉公

遠慮奉伺、次順太田權太夫

交代可被、仰付哉之儀申出、交代不及旨

被、仰付、

但、三左衛門從弟森岡民部義、付、

遠慮伺、以御用括不及遠慮旨、

被、仰付、

〔九二七〕

109 同年三月六日

一 薄田勇次郎申出、青森町年寄

兒習村井新藏義、親新助無

調法之儀御座、御格式御取放

之上、懐被、仰付、恐入、御奉公

遠慮伺申出、勢勇御用ニ而近、出立

ニ付、格段之以、御沙汰、御用捨被

〔九二八〕 仰付、申遣之、

但、同日出立之節、親直中ニ付、門戸出入
之儀、目立不申、出入致、様、仰付、

〔九三〇〕

110 天保十五年六月廿二日

一 石郷岡三太夫申出、成田甚吾儀

無調之儀御座、於江戸表御役被

召放、御沙汰中、懐被、仰付、旨申來、

依之、同居宅門戸閉閉之儀如何

相心得可申哉之儀、門戸閉ニ不及、家内

之儀者相懐罷在、様被、仰付、

〔九三三〕

111 同年十二月廿四日

一 御日記役申出、斎藤甚五兵衛二男

源八郎義、公辺、遠嶋、仰付、ニ付、

親類遠慮有無之儀、御先例無御座

、ニ付、當勤之族追放、被、仰付、節、

親類遠慮有之、得共、二三男、而

追放、被、仰付、節者、其父兄斗

〔九三六〕

〔九四〇〕

遠慮有之、親類遠慮者無御座也、

先年成田徳右衛門忤重無調法ニ而

入牢被 仰付、節、子供並ニ以得と母、

徳右衛門義御役下、親類遠慮者入

牢之部ニ而取扱、此度之儀者、右江

引比、親類遠慮之儀、十里以上

追放之部ニ而、兄弟者十二日、伯父甥

七日、從弟者五日之遠慮ニ相成申也、

〔九四ウ〕

右之通可被 仰付哉之儀、伺之通、

但、本文追放之儀者、

公邊之追放ニ者無之、御國地之儀ニ也、

112 弘化二年二月廿四日

一 御日記役申出也、百川文平儀、隠居

之上他出差留、親類見繼被 仰付、ニ付、

親類遠慮之儀、御定ケ条無御座、間、

〔卷〕
〔四十一〕 續居之部ニ而取扱可被 仰付哉之儀、

伺之通被 仰付也、

〔九五オ〕

113 弘化二年四月十三日

一 諸在勤之族、親類之儀ニ付遠慮伺

差出、節、被仰付有無ニ不拘、是迄代

伺之上罷上以得共、御費之儀茂有之

ニ付、以來諸在勤之節者、御用相濟

罷上、処ニ而、遠慮伺差出、様、被

仰付、間、可被差心得居、旨、御日記役江

〔九五ウ〕

被 仰付也、

114 弘化二年四月廿日

一 大道寺族之助義、從弟森岡民部

義ニ付、恐入也ニ付、御奉公差扣奉伺

也之処、御用捨を以、不及差扣旨

被 仰付也、

但、今日伺書差出、退出之筈ニ也也、

〔卷〕
〔四十二〕 不也哉、右之通ニ仰付、ニ付、直ニ御次罷出、

御側役を以御礼申上、追出之処ニ而、

五郎左衛門宅江御禮罷越也、

〔九六オ〕

115 弘化四年十二月八日

料

資

一組支配御阿之節、其頭共并番頭共不_レ裁、

遠慮伺可差出等之_レ處、近來違成

之_レ族も有之_二付、以來早速差出

之_レ様と仰付旨、三組頭江申進之、

一組付之_レ面々、於御用人宅、役下以上

之_レ重御阿之_レ面々、頭方遠慮伺も

有之_レ儀ニ付、組拔之_レ儀即刻差出

之_レ様、御家老附留書江申付也、

〔一行分空白〕

〔九六ウ〕

116 弘化四年三月二日

一長崎傳八郎申出也、親慶助儀、家來

無調法之_レ儀ニ付、去月三日御奉公

遠慮伺之_レ通被_レ仰付、奉恐入也、私

〔五七〕

油川濂目付と仰付、相勤罷在、交

代相濟、昨日罷上、ニ付、御奉公遠慮

伺之_レ儀、御用捨を以不及遠慮旨

被_レ仰付也、

但、傳八郎遠慮之_レ儀、親遠慮中

〔九七オ〕

一六八

117 弘化四年正月七日

一堀五郎左衛門義、去ル十二日御客様

御座也_レ處、御手當と下方之_レ儀ニ付、被

仰出之_レ趣、恐入ニ付、御奉公差扣

奉伺也_レ處、以_レ御用捨不及差扣旨、

と仰出旨、申來也、

〔九七ウ〕

118 同年八月七日

一菅沼多作遠慮、御免被_レ仰付也、

但、四日日ニ而_レ御免之_レ部ニ有之_レ由得共、

此節考人勤、御駒仕込方取中之

場合ニ御座也_レ間、御免と仰付度

旨、御側後より申出、本文之_レ通、

〔九八オ〕

119 弘化四年八月廿日

一大沢官助申出也、津陸本次郎用

遠山田忠治儀、昨日候被_レ仰付、也、

先日被 仰渡之趣、奉恐入^レニ付、遠慮
伺申出^ニ而、伺之通申付^レ、日敷五日ニ相成
以^ハ、免許可申付旨、承届^レ、

〔九九ウ〕

120 同年十一月廿八日

一山田衛門八申出^レ、所持之甲冑秋元

藤弥江引當之儀ニ付、御取扱ニ相成、処、

以 御威光、御返^ト仰付^レ、然処段々、

御取扱ニ相成、恐入^レニ付、御奉公遠慮

〔案〕伺申出、得^ト母、不及差出旨、申遣之、

〔四十五〕

但右甲冑者藤弥名目ニ而田中

登太郎親才八郎引當ニ取、儀ニ付、

才八郎悞、登太郎義知行之内五拾石

被召上、御役下、登太郎悞御馬廻退役、

親江御返、藤弥儀以下支配江御役下、

被 仰付^レ、

〔九九エ〕

122 同年十二月廿七日

一石岡勘四郎申出^レ、悞 御免被

仰付、処、先達而被 仰渡之趣、恐入^レ

ニ付、御奉公遠慮、伺之通^ト仰付^レ、

〔案〕

〔四十六〕

但、同人義、悞繁太郎^{〔無罪法〕}

之儀御座^レ而、隠居之上、他出差^{〔〕}

仰付、恐入^レニ付、遠慮伺之通

ニ仰付、御用状^{〔〕}申出、事、

〔四行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔一〇〇オ〕

〔一〇〇カ〕

121 弘化四年十二月廿八日

一三上才八義、御濟口間違之儀ニ付、

〔九九ウ〕

〔案〕

〔四十八〕

〔表八行分空白〕

〔一〇二オ〕

料

〔裏八行分空白〕

〔一〇二ウ〕

一七〇

資

七 御預

123 天保十三年三月十四日

一 黒龍本弥申出ゆ、板柳御齋立合之処、

黒龍主殿見継ニ付、如何可被仰付哉之儀

奉伺ゆ処、外親類名前申上、様被

仰付、間、右御藏勤中忤彦三郎可被

仰付哉之儀、申出之通、

124 同十五年二月七日

一 鳴海潤八申出ゆ、赤石左太郎母

不行状ニ付、旧冬私江御預被 仰付ゆ、

然処今度親類共一同相談之上、浦ノ

町組荒川村身寄之者ニ、當分之内

為阿差遣相慎せ度、間、御預

御免之儀、伺之通、見難引取被 仰付ゆ、

〔一〇三ウ〕

126 弘化三年三月十三日

一 唐牛基助四男富弥、御馬廻与力

中野壽助三男俊吉儀、去八月

百沢与り帰之節、大組足輕柿崎朝次郎

乱心与見受ゆ間、差押ゆ旨、并中野

俊吉兩人ニ而召進ゆ節、雜人共ニ打擲

致せゆ儀無之旨、委細申出ゆ得共、申分

被 仰付ゆ、

〔未〕
〔五十五〕
格段之御沙汰を以、親四郎兵衛御預

〔一〇四ウ〕

〔一〇三ウ〕

125 弘化二年七月廿三日

〔一〇四ウ〕

難相立義者、乱心与見受取押ゆへ、其場ニ而取亂、乱心ニ相違無之ゆへ、其所

之村役江預置、共段相違可申處、

乱心ニも無之もの手込之上引連、途中

ニおゐて雜人共江打擲致せゆ段、無

相違相聞得、不埒ニ付、改而他出

差留之上、親、江御預被

〔朱〕 仰付ゆ、

〔一〇五十一〕

〔一〇五十一〕

127 弘化三年十一月廿三日

一 御徒目付内藤清作伴龜吉儀、御難

元与り丁持八藏ニ米附賦せゆ儀無之

處、丁持共難題申懸、不届ニ付、

御締方ヒ仰付度旨、親清作申出有之、

吟味之処、龜吉語取ゆ義相違無之

旨及白状ゆ段、是又清作申出、

然者右躰手段之上米語取ゆ段、

御家中子弟ニ有之間敷、致方甚不届

ニ付、急度可被 仰付ゆ處、此節病氣

〔一〇五之〕

128 同年正月廿日

一 成田藤九郎江御預被 仰付居ゆ

〔朱〕 小山内儀兵衛義、御自分江御預被仰付、

〔一〇五十二〕

是迄之通於一間所憤被 仰付ゆ旨、

外崎平左衛門へ申遣之、成田藤九郎

江茂申遣之、

但、引移之節、親類式人、兩目付之内

老人、大組諸手足程之内老人、途中

一間所出来迄見懸被 仰付ゆ、

129 弘化四年二月三日

一 長柄之者工藤弥左衛門伴惣助義、去

三月十一日之夜、龜甲町ニ而白取源之助

義、館美三郎江慮外致、儀、三郎

を召捕ゆ儀ニ付、吟味之処、申出相

〔一〇六ウ〕

〔一〇六ウ〕

料

違ニ相聞得、其上源之助申合之上、
三郎を怪敷者之旨相偽、町同心

借用上、自身三郎を組留、友、

召捕、町同心共東長町上番所江

資
三郎を引付、節、附添ハ差圖之上、
〔五十三〕

繩打せゆ段、怪き身分ニ而、不恐

御威光、大膽之致方、不屈至極之者

ト付、急度可ヒ 仰付ゆ得共、格段之

以御沙汰、親弥左衛門江御預被仰付、

嫡子ニ不相立ゆ様被 仰付ゆ、

130 弘化四年十一月十二日

一松井四郎兵衛竹淳五郎儀ニ付、

〔出相〕
内意申出、詮議之処、御阿後、急度相

慎罷在、旨、相聞得、殊ニ親四郎兵衛

義老年ニ茂相成、ニ付、御阿後

年數無之ゆ得共、格段以御沙汰、御預

御免被 仰付ゆ、

〔一〇七ウ〕

一七二

131 天保十二年八月十四日

一成田兵作申出ゆ、西川文平儀御用

之筋御座ゆ而、御預之上他出御差留

〔本〕被 仰付罷在、処、去九月頃より下血
〔五十四〕

相煩難儀ニ付、宿元江引取之上、養生

仕度間、旧冬奉願ゆ得共、今被仰付

無御座、又々恐多奉存ゆ得共、弥

増疲勞仕ゆ間、快氣迄之内、宿元江

引取之上、養生仕度儀委細申出、

病中帰老之上養生被 仰付、尤

親類見難致、様被 仰付ゆ、

〔一行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔裏八行分空白〕

〔一〇九ウ〕

八 追 放 附返返町拂鞭刑

132 天保十四年六月三日

工藤文番弟竹次郎与申ゆ、遠方江

〔一〇九オ〕

〔一〇八ウ〕

〔一〇六〕
〔五十六〕
〔朱〕 仰付け、
御搦弘前七里四方追放被
不筋之儀有之不屈之者ニ付、大場
罪越、御役人使之旨申唱、金子無心
い多し、其上度々悪行いし、殊ニ色々

133 弘化二年六月十日

一町御奉行遠山左衛門尉殿を御留守
居老人御呼出罷出、処、先達而
遠嶋被 仰付、齋藤源八郎儀、未タ
出帆不致、在窄中ニ而罷在、然処去月
廿七日出火之節切放れ処、申渡を相守
立歸ハニ付、中追放ト仰渡、尤先達而
落着相済れ得共、御心得送御達し旨、
与力中村次郎八申開れ旨申出、右中
追放場所、別紙左之通、
中追放
御搦場所
武藏 山城 攝津 和泉

〔一〇七〕

〔一〇六〕

134 弘化二年八月四日

大和 肥前 東海道筋
本曾路筋 下野 日光道中
〔朱〕 甲斐 駿河 陸奥
〔五十七〕
右之場所徘徊をへ可らざるもの也、
一三奉行申出れ、庄内熱海村漆掻
男女共拾四人之者共、當五月廿六日
參ヶ沢町折戸屋武兵衛方江止宿、
詰合役人ニ而御關所入切手紙未詮議
之処、田野沢村所出の上陸い多し、
水揚切手紙も持參不致旨申出、
御領法を犯し不屈ニ付送返之儀
申付、処、翌朝出立、不屈之者共ニ付
本國江送返、以來御當領入御差留
可被 仰付、処、格段之御沙汰を以
此度者不埒 御免被 仰付、掻子
と母漆掻仕廻、下山之処ニ而五丁目
藏屋敷江呼上、郡所漆方取扱ニ而

〔一一一〕

〔一一一〕

料

〔卷〕申渡、襖被 仰付也、
〔五十八〕

〔一一二才〕

資

135 弘化二年六月四日

一三奉行申出也、別紙書付御渡ニ付

吟味仕、処、斎藤甚五兵衛申出ニ者、

二另源八郎義於

公邊遠嶋ト仰渡、揚屋入被 仰付

罷在也処、出火之砌、揚屋切放、鎮

火後立痛、処、御定法相守神妙之旨

ニ而中追放ト 仰付、ニ付、秋田大館邊江

〔一一二才〕

参也処、脚氣差發旅宿ニ而養生

不行届、御搦地恐入也得共、参着仕、旨

ニ付、養生差加ヘ快氣寄^{〔通也〕}之也ニ而

御搦地之外江出立仕せ度体間、

御聞届被 仰付度旨、委細別紙

之通申出也、然者源八郎義於

公邊中追放被 仰付、身分不願

〔采〕恐病氣ニ由御搦地江立入、甚五兵衛

〔五十九〕

〔一一三才〕

一七四

義、右躰之者養生中差置度

旨申出、段、心得違ニ付、申出之趣聲

被 仰付旨被 仰付也、源八郎儀腰繩

付之上、町同心附添、錠ケ因御關所

口与り差出、様、左ハ、甚五兵衛江

ト 仰付方之外、町奉行取扱、様可仕旨、

沙汰之趣、

136 弘化四年十二月四日

〔一一三才〕

一深浦町同心工藤与次兵衛儀、先年

不届之儀有之也而、公邊方追放被

仰付、処、別紙之通申來、間、住居并

身寄之者名前取礼、早速可ト申

出、旨、深浦町奉行江申遣之、

右別紙左ニ、

元御家來
工藤与次兵衛

〔恐〕右之者儀、先年不届有之、追放申付

〔六十〕

也之処、申渡也儀有之也間、住居相知

也ハ、呼寄、其段可被申聞也、尤死失欲

〔一一四才〕

行衛不相知ゆハ、親類身寄之者
相札可被申聞事、

但、右之外深浦町之者七人所拂

御免之儀、其外請證文ハ委細

有之事、同年四月廿四日右被

仰付之趣、其向江ヒ仰付、処、別紙

御請證文相添申出、間、御留守居^江

ヒ 仰付、様、三奉行沙汰委細事、

同年六月十八日御留守居より、

右之もの共追放被 仰付、処、此度

御免被 仰付、旨、委細申來事、

〔二一四ウ〕

不屈之者ニ付、御給分ヒ召上、三里
四方追放被 仰付ゆ、

138 天保十二年七月廿一日

一 諸手足輕工藤長四郎儀、先年不屈

之儀有之由而、公辺方追放被

仰付、処、此度 御免被仰付、旨、

別紙之通申來由間、身寄之もの

取札、可被申付旨、町奉行江申遣之、

但、身寄之もの無之旨申出、於江戸表

諸手警固江被 仰渡、ニ付、其後何

方江も不申遣ゆ、

〔二一五ウ〕

137 弘化四年八月十三日

一 御召馬附小人和徳村忠藏義、當

〔未〕五月千住取中田屋龍助方ニ而、

〔六十一〕

〔は〕そつ与申女与相對死仕損ゆ儀ニ付、

吟味之処、委細申出茂有之由得共、

申分難相立義者、場合柄之儀

御外聞茂不願、右躰之致方甚

〔二一五オ〕

139 天保十二年閏正月廿二日

〔未〕

一 御中陰中、三奉行与り鞭刑沙汰

申出ゆ而も、見合置、様、留書申付ゆ、

〔二一六オ〕

140 天保十二年八月廿三日

一 三鷹町三次郎儀、無極印証掟

一七五

料

資

ゆ之儀ニ付、御刑法被行方之処、家
方ニ罷有ゆ源太郎を名代ニ相立ゆ

段、不届ニ付、鞭刑六鞭被行、居町
徘徊是迄之通被 仰付ゆ、

一右源太郎儀、三次郎手前ニ而日数
廿日押込、三厩町名主中嶋久藏
義、右之儀ニ付、日数廿日戸ノ被
仰付ゆ、

〔四行分空白〕

〔表〕
〔六十三〕

〔裏八行分空白〕

〔二一七ウ〕

〔以下虫損ニ付

閱覽停止〕〔史料館指図書〕

〔以下、三六丁封入〕

〔二一八オー一五三ウ〕

〔表八行分空白〕

〔表〕
〔百八〕

〔裏八行分空白〕

〔二五四ウ〕

弘前市立弘前図書館所蔵の『御用格』および『分限帳』につ
いては、一九八九年四月以来、保存のため閲覧禁止措置がとら
れている。最近、弘前市政百周年記念事業の一つとして、『御
用格』の翻刻作業が進められ、近日中に刊行されるとの由であ
る。しかし膨大な量でもあり、そのうちの寛政本とよばれる第
一編のみが対象ともいわれている。『御用格』を利用しての刑
法典および判決例の詳細な検討は今後の刊行成果を踏まえるこ
ととしたい。それまでの準備作業として、先の『要記秘鑑』の
内容紹介に続く作業を試みる。

ところで、すでに述べたように弘前図書館の『御用格』第三
編は一部を欠くが、その部分は国立史料館に所蔵されている。

同館の「陸奥国弘前津軽家文書目録」には

御用格 二一―二四 (文政八―弘化四) 半 四冊 一五九

とある(『史料館所蔵史料目録』第十二集 昭和四一年三月、
四五頁)。東京都新宿区下落合の津軽邸に戦時中保管され、昭
和三年に寄贈された約三五〇〇点の文書・記録の一つである
(同、九五頁)。

『御用格』については、『弘前大学国史研究』第二十六号(昭
和三六年六月)・第二十七号(昭和三六年九月)に大江正文氏ら
の作業成果が「(史料解説) 御用格」(一・二)として発表され

たのを初めとして、弘前市立弘前図書館郷土資料目録第七巻の『津軽家文書目録』その一(昭和四四年一〇月、五三〜五六頁)に、同館所蔵分の詳細が明らかにされ、ひきつづき同館の『弘前図書館蔵郷土史文献解題』(昭和四五年三月)で作成経緯について、それまでの成果を踏まえてまとめられている(四三〜四六頁)。

『御用格』は日記方に集中された藩政に関する主要記録の中から、編年史ともいうべき藩日記の作成・清書作業とは別に、執務参考資料として、項目別に主要法令・通達、事例・判決例などをまとめたもので、最初の編集は九代寧親の襲封後に行われ、その後、藩主の代毎の編集をこころがけたもののようにある。『要記秘鑑』はこの編目を踏襲している。

第三編については、文政八年〜天保九年の分冊と天保十年〜弘化四年の分冊が合綴されており、前半の分冊は十代藩主信順の治世に相当し、後半は第四編(嘉永元年〜安永六年)と合わせて十一代順承の治世に相当することは明らかにされている(『弘前大学国史研究』第二六号、四二頁)。信順代が薄冊であるため、合綴したものであろうか。合冊の前半と後半は、目次をみても必ずしも一致しない。

国立史料館所蔵本が、弘前図書館所蔵本と一体をなすべきも

のであることは、目録内容からも明らかである。ところで史料館所蔵本四冊はいずれも同一体裁で虫損も甚だしいが、さらに「二十三」の表紙の表側と背が煤煙で濃黒褐色に変じ、表題の墨色すら読取りにくくなっており、さらに虫喰穴からも煤煙の入った痕がみられ、他の三冊も重ねられた状態で煤煙を受けたらしく、表紙の周縁、背などに痕跡をとどめている。これがいづつの火災かは、弘前図書館本との比較で明らかになることだろうが、過去の保存状態が良好であったとはいえない。いずれも未補修のため、各冊の後半は閲覧禁止措置が講じられ、封じられている。

個々の事例についての検討は、次の機会にゆずり、閲読できた各事例の年次別分布を表としてみた(表1・2)。

御用格の内容検討に際しては、御用格が日記方で作成されている以上、同じ原史料に基づき作成されたと考えられる藩片日記との対比が必要であるのは、いうまでもあるまい。ここでは全体の比較検討は後日の機会に譲ることにして、一例のみをあげてみる。

一三の唯一の例としてあげられた53については、藩庁の国日記で、文政十年十月二十六日条に処刑に関連する詳細な記載がみられる。

計	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	計
8	51												文政八
9		37				14							九
10	53	38											十
11		39		28									十一
12		40	29										十二
1	54	41	36			17						1	天保元
2						20						2	
3												3	
4	55	42		30		21		13				4	
5	56	45		31								5	
9												9	
11												11	
7	57	43		35		22						7	二
		46											
		47											
3													三
4	58												四
5						23							五
						24							
6	59												六
7	60												七
8			48										八
9	61	52	49			25	15					10	九
	62		50			26						12	
	63					27							
計	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二

表1のうち、6と28、9と35は同一内容が二カ所で事例としてとりあげられたものである。

表 2

八	七	六	五	四	三	二	一	計
		105 106 107	87 88		81	75	64 65 66	天保十
138						80		十一
139 140	131							十二
		123						十三
132		108 109	89			76	67	十四
	124	110 111	90 91 92		82	77		十五
133 134 135	125	112 113 114	93 94 95			73	68 69 70	弘化二
	126 127 128	96 97 99			83 85 86	79 72	71 72	三
136 137	129 130	115 122	100 104		84		73 74	四
九	九	八	八	〇	六	六	一	計

表2のうち96と126、97と98、99と127、100・101・102と129は、同一事件に関するものであり、125と130は関連事案である。

一、三奉行沙汰書左之通、

一、木造村鎮蔵と申者、重罪之ものに付、三日肆之上、獄ニ被

行方可申上候得とも、津場所取極り不申候ニ付、藤刑巻通

りに申上候之處、此度於江戸表御問合之趣に随ひ斟酌之上

取極可申上旨被 仰付候間、左之通、

一、津場之儀は、土手町御制札前川添余地御座候之間、其場へ

小屋懸之儀、別紙絵図面之通被 仰付候様、番人之儀は、

上番、町同心式人・牢守老人、下番は牢屋番人四人、外に

銀藏取始末いたし候者之儀式人、何れも昼九時代り台候之

儀、

一、肆之儀は、初日・二日目之分は、朝五時肆場へ引出夕八半

時局牢被 仰付候之儀、

一、三日目之分は、朝六時半肆場へ引出、四時局牢之上、荒縄

懸引廻候之儀、

一、銀藏儀、肆場へ出歸とも、警衛人数之儀は、鞭刑に被行候

節之通、尤出歸共、足輕目付老人附添被 仰付候様、

一、銀藏へ肆申渡之儀、左ニ、

我儀、去戌十月十七日之夜高館村領法嶺院ニ於て、住僧并

寺内ニ居候者共、都合四人打殺、外式人へ深手を負せ、錢

并衣類等盜取、右跡取隠可申と、同寺へ火を仕懸ケ候儀に

料

付召捕、詮義之處、相違無之旨及白状、言語同断、極悪重罪之者に付、於土手町橋側、三日之内歸し者ニ被 仰付仕懸ケ候始末、言語同断、極悪重罪之者に付、三日肆之上旨、引出候初日、於牢前、牢奉行申渡候様、

資 一、肆場捨札文言、左ニ、

木造村出生

無宿

銀 藏

当亥式拾五歳

此もの儀、去戌十月十七日之夜、高館村領法領院ニおめて住僧并寺中に居候もの共、都合四人打殺、外式人へ深手を負せ、錢および衣類等盗取、右跡取隠可申と、同寺へ火を仕懸ケ候始末、言語同断、極悪重罪之者ニ付、三日之内歸し置もの也、

月 日

一、御仕置場へ三十日之内、捨札、左之通、

木造村出生

無宿

銀 藏

当亥式拾五歳

此もの儀、去戌十月十七日之夜、高館村領法領院ニおめて

住僧并寺中に居候もの共、都合四人打殺、外式人へ深手を負せ、錢ならび衣類等盗取、右跡取隠可申と、同寺へ火を仕懸ケ候始末、言語同断、極悪重罪之者に付、三日肆之上町中引廻、磔ニ行ふもの也、

月 日

一、銀藏儀木造村出生に付、同所村役人、途中附添ならび肆場

へ相詰候様、

一、肆場小屋懸并捨札建方等迄悉皆、牢奉行取扱被 仰付候様、

一、御仕置場捨札建方等之儀、是又悉皆、牢奉行取扱候様、

右之通被 仰付候様、左候は、銀藏引廻御仕置之外、三日

肆之内出帰共、途中附添、足輕目付へ被 仰付方、大目付

へ被 仰付候様、在方之儀は郡奉行にて申付候之様、

一、小屋懸、肆申渡并其外とも、町奉行にて夫々可申付旨、何

れも沙汰之通被仰付之、

一、磔刑に先立つ肆の準備・執行、その手続き・担当者などが具體的に指示されている。

本書の体裁・作成などについては、巻二十二の紹介に際して、さらに述べることにする。

本資料の翻刻に、快くご了承頂いた国立史料館に謝意を表す。

一九八九年度 法学部の記録 (一九八九年四月～一九九〇年三月)

(一) 教授会記録

四月二日	第一回定例教授会	(於 以下 同 本学)
五月一〇日	第二回定例教授会	
六月一四日	第三回定例教授会	
七月二日	第四回定例教授会	
一〇月四日	第五回定例教授会	
一〇月一八日	第六回臨時教授会	
十一月八日	第七回定例教授会	
十二月三日	第八回定例教授会	
一月二七日	第九回定例教授会	
二月一四日	第一〇回定例教授会	
二月二二日	第一一回臨時教授会	
三月一三日	第二二回定例教授会	
三月二九日	第二三回臨時教授会	

(二) 人事

① 福本憲男教授は一九八九年四月一日付をもって、法学部長に就任した。

② 川口是教授、東條武治教授、金澤俊孝助手は一九九〇年三月三十一日付をもって退職された。

(三) その他

一九八九年一〇月九日・一〇日の両日、八尾フリズムホールで民主主義科学者協会法律部会が開催された。